

### 3. 3 菌類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

〈子のう菌類〉

カテゴリー 分類群	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報不足	合計
初版 1996	0	0	1	0	3	4
改訂第2版 2006	10	5	7	0	0	22
改訂第3版 2018	7	5	0	0	6	18

〈担子菌類〉

カテゴリー 分類群	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報不足	合計
初版 1996	0	0	23	1	97	121
改訂第2版 2006	2	4	34	1	37	78
改訂第3版 2018	2	4	4	2	55	67

※初版のカテゴリーのうち、絶滅危惧種は絶滅危惧Ⅰ類、危急種は絶滅危惧Ⅱ類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

#### (1) 本改訂でのおもな留意点

掲載種の選定については、改訂・沖縄県版レッドデータブック（沖縄県，2006）に掲載された菌類種を基に、レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）（環境省(編)，2015、以下レッドデータブック 2014)、国内のきのこを扱った文献、第2回改訂・沖縄県版レッドデータブック編集委員会及び菌類分科会の委員の経験と知見等を総合し、県内において希少性の高い種を選定した。

選定種のカテゴリー区分に関しては、レッドデータブック 2014に掲載されたレッドデータブックカテゴリー（環境省，2015）の日本版RDBカテゴリーに準じて、絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群、情報不足の五つのカテゴリー（以下、カテゴリー）に区分したが、今回準絶滅危惧に該当する種はなかった。レッドデータブック 2014ではこれらのカテゴリーの他、絶滅と野生絶滅のカテゴリーがあるが、第2回改訂・沖縄県版レッドデータブックの菌類編では、改訂・沖縄県版レッドデータブックに準じ、次の理由でこれらカテゴリー区分をしていない。①子実体形成の頻度によりカテゴリーを区分しているが、調査時に子実体形成が認められない場合でも、菌類の本体である菌糸は植物の枯死体、リター層、あるいは土壌中などに生息していて、その後子実体を形成する場合があること、②菌類の本体である菌糸の直接観察や菌糸のみによる種の識別は困難であること、③県内に生育する菌類の十分な調査がなされてないこと、④沖縄県において過去から現在に至るまで菌類の記載が十分ではないこと、などにより、絶滅(EX)と野生絶滅(EW)のカテゴリーを適用することは適切ではないと判断した。

評価基準に関しては、数値基準による客観的評価が可能な定量的要件を適用することが好ましいが、菌類の場合、減少率等の数値による評価データが得られる種は全くなく、今回の改訂版でも定性的要件を重視した。

## (2) 本改訂で明らかになったこと

選定した種の子実体形成の確認頻度が少ないことが、過去から現在に至って減少してきた結果か、あるいは以前から頻度が少ない種であったのかを判断するための過去の調査結果が乏しい。しかし、確認頻度の稀な希少種は、生態系の攪乱により、絶滅の危機に陥ることが懸念される。確認される子実体が少ない原因として、ミクロな開発行為や採集行為に起因する場合、あるいは、マクロの環境要因によるものがある。近年の地球規模の温暖化、その年ごとの気温の変化、降雨量、台風の影響などの気象要素も子実体発生には影響する。今回は、掲載種ごとにこれら要因を踏まえて、できる限り総合的に考察した。

執筆者 寺嶋 芳江（琉球大学熱帯生物圏研究センター・教授）

### (3) 掲載種の解説

#### <子のう菌類>

##### 1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 和名 : イリオモテクモタケ  
分類 : バッカクキン科 バッカクキン目  
学名 : *Cordyceps cylindrica* Petch  
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 子実体は、地表生トタテグモ類から生じ、地上生、単生、円筒状のタンポ型、地上部の高さ約 35 mm。結実部は柄の上端に生じ、13×3.7~4.0 mm、淡い淡黄褐色。柄は太い円柱形、径 2~3mm、白色で肉質、結実部との境はやや明瞭。子のう殻は埋生、長頸のあるフラスコ形、850~1000×200~225 μm、孔口は微突出する。宿主の表面は白色の菌糸膜で包まれる。不完全型はクモタケ (*Isaria atypicola* Yasuda)。
- 分布域 : 南西諸島、屋久島、九州~山口、トリニダード・トバゴ、タイ、ブラジル、中国。  
県内の分布 : 西表島。  
生育環境 : 西表島の照葉樹林の林床に生じる。  
生育状況 : イタジイ、ウラジロガシ等の林内に生息する地表生トタテグモ類に寄生し、6~7月に宿主の頭部から子実体を生じるが、観察されるのは稀である。  
学術的価値 : 不完全型であるクモタケは本州において普通に見られるが、完全型である本種の発生は、本州、沖縄双方において希少である。  
減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。  
備考 : 国内では、1971年に西表島ではじめて採集された。
- 文献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 213, pl. 34, fig. 140.  
丸山賢治, 1991. 西表島の冬虫夏草 基礎データ. 冬虫夏草, 11: 74-76.  
清水大典, 1983. 冬虫夏草の窓 82年. 冬虫夏草, 3: 9-10.  
清水大典, 1994. イリオモテクモタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 323-324, pl. 309, fig. 218.  
清水大典, 1997. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 211.  
日本冬虫夏草の会編, 2014. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 224.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

- 和名 : ハエヤドリトガリツブタケ  
分類 : バッカクキン科 バッカクキン目  
学名 : *Cordyceps iriomoteana* Kobayasi et Shimizu  
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 子実体はツブタケ型、高さ 3~10 mm、結実部は上端か中央部、または虫の体表に直接生じ、裸生

型。子嚢果は卵形、600~700×370~400 μm。二次胞子は3~4×1 μm。

- 分 布 域 : 沖縄県。  
 県内の分布 : 西表島(固有)。  
 生育環境 : ハエの胸部背面、尾部に生じ、気生型。  
 生育状況 : ハエに寄生し6~7月に葉上で宿主ハエの胸部背面か尾部から有柄の子実体を生じるか、体表面の一部を覆う白色の菌糸膜上に直接子のう果をつけ形成する。発生地は狭い地域に限られ、形成される子実体も極めて少ない。  
 学術的価値 : 西表島のみから知られており、地理的分布および生態学上貴重な種である。  
 減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。また、近年の採集例も認められていない。  
 備 考 : 本種はハエに寄生する冬虫夏草の仲間であり、空中湿度の高い森林内でのみ見つかるまれな菌である。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。本種は分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

- 文 献 : 佐藤, 2015. ハエヤドリトガリツブタケ. “環境省レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 510.  
 小林義雄・清水大典, 1983. ハエヤドリトガリツブタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 204, pl. 31, fig. 125.  
 清水大典, 1994. ハエヤドリトガリツブタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 318, pl. 299, fig. 212.  
 清水大典, 1997. ハエヤドリトガリツブタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 203.  
 Kobayasi, Y, and D. Shimizu, 1982. Cordyceps species from Japan 4. Bull. Nati. Sci. Mus., Tokyo, 8(3): 79-91.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

- 和 名 : **ヒメハルゼミタケ**  
 分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目  
 学 名 : *Cordyceps polycephala* Kobayasi et Shimizu  
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)                      環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

- 形態の特徴 : 子実体は、地中のイワサキヒメハルゼミの幼虫から生じ、地上生、単生、やや不規則なタンポ型、地上部の高さ20~25 mm、柄の上方で2~3分岐する。頭部は柄の上端または上部と側部に集合する裸生の子のう殻からなり、高さ1.2~2.0 mm、径2.2~3.3 mm。柄はやや不規則にゆがんだ円柱形で分岐し、径1~2 mm、平滑、繊維肉質、柄と結実部との境界は明瞭、地中部は暗色を帯び、直根状に宿主の虫体とつながる。子のう殻は卵形、850~880×600~650 μm、淡い桃黄色。子のうは径3.5~4 μm。二次胞子は3~4×1 μm。  
 分 布 域 : 沖縄県。  
 県内の分布 : 西表島(固有)。  
 生育環境 : 亜熱帯照葉樹林の林床。河川近くのイタジイ、ウラジロガシ、フカノキ、モクタチバナ、リュウビソウなどが生育する湿り気のある林床に生じる傾向がある。  
 生育状況 : 地中のイワサキヒメハルゼミの幼虫に寄生し、子実体は6~8月に宿主の頭部または口器から生じる。子実体の発生は極めて稀である。  
 学術的価値 : 本種は西表島からのみ知られており、地理的分布の上で貴重である。生態学的研究はあまりなされてなく、今後多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。  
 減少の要因 : 発生地における実態調査の記録がないため、本種の観察が稀である要因は不明である。

備考 : 採集の事例は1975年と1989年の2例がある。本種は日本固有と考えられ、初めて発見されたのは西表島シイラ川の湿地であり、再発見は同島の仲間川の上流からである。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。本種は分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

文献 : 佐藤大樹, 2015. ヒメハルゼミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 519.  
小林義雄・清水大典, 1983. ヒメハルゼミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 161, pl. 12, fig. 41.  
清水大典, 1994. ヒメハルゼミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 184, pl. 38, fig. 24.  
清水大典, 1997. ヒメハルゼミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 47.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : エダウチタンポタケ

分類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学名 : *Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、イラガの繭から生じ、単生、または2~8個を生じ、分枝性のあるタンポ型、地上部の高さ15~35 mm。結実部は柄の先端に生じ子のう殻の集合体、球形か偏球形で高さ2.2~3.5 mm、径2.5~5 mm、淡橙黄色。柄は不規則にゆがんだ円柱形、径1.5~2 mm、平滑で肉質、結実部との境は明瞭である。柄の先端または側枝に頂生する白色不稔の小頭を生じる。子のう殻は裸生、紡錘形、800~830×370~380 μm。子のうは径3~4 μm。二次胞子は3~4×1 μm。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島 (固有)。

生育環境 : 亜熱帯照葉樹林の林床。イタジイ、ウラジロガシ、コミノクロツグ、オニヘゴ、リュウビンタイ、オオヘツカシダなどが繁茂する林床に発生する。

生育状況 : 大形のイラガの硬い繭に寄生し、11月~3月の低温期に子実体を形成する。子実体は稀に形成される。

学術的価値 : 西表島に固有の種で地理的分布の上で貴重である。生態学的に不明な点が多く、研究課題を多々残している。また、近年の採集例も知られていない。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : イラガの硬繭に生じる日本固有の冬虫夏草。1979年、西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。ラテン語の活用が間違っていたため、Sung et al. (2007)により、種小名の *ramoso* 部分が *ramosi* に修正された。分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

文献 : 佐藤, 2015. エダウチタンポタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 520.  
小林義雄・清水大典, 1983. エダウチタンポタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 202, fig. 121.  
清水大典, 1994. エダウチタンポタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 212, pl. 94, fig. 61.  
清水大典, 1997. エダウチタンポタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 84.  
Kobayasi, Y, and D. Shimizu, 1983. *Cordyceps* species from Japan 6. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 9(1): 1-21.  
Sung, G-H., N. L. Hywel-Jones, J-M. Sung, J. J. Luangsa-ard, B. Shrestha and J. W. Spatafora, 2007. Phylogenetic classification of *Cordyceps* and the clavicipitaceous fungi. Stud. Mycol., 57: 5-59. DOI:

10.3114/sim. 2007.57.01.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **アカエノツトノミタケ**

分類 : バツカクキン科 バツカクキン目

学名 : *Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、甲虫の幼虫から生じ、地上生、単生、ツトの実型、地上部の高さ 36~48 mm。結実部は柄の上部に生じ、やや膨らみのある円筒形、淡いチョコレート色、高さ 6~8 mm、径 1~1.8 mm。柄は円柱形、暗赤色で硬い肉質、径 1 mm、結実部との境は明瞭、先端は結実部の上部から尾状の突起となって伸びる。子のう殻は埋生、洋ナシ形、420~450×170~200 μm、孔口は細点状に密布する。子のうは径 5 μm。二次胞子は 4~5×1.5 μm。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島（固有）。

生育環境 : 河川沿いに広がる亜熱帯照葉樹林の平坦な砂質土壌の林床に生じる。

生育状況 : イタジイ、コミノクロツグ、オニヘゴ、リュウビンタイなどが生育する林床で、甲虫の幼虫の胸部から生じる。6~7月に発生するが、極めて稀である。

学術的価値 : 本種は西表島に固有の種で地理的分布の上で貴重である。また、稀に採集されるため、本種の生態については不明な点を多々残している。近年では 2005 年に発生が確認されている。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : 1980 年に西表島で採集され、1984 年に同島の仲間川上流で再発見された日本固有の冬虫夏草。冬虫夏草の中でもまれな菌である。野外での発見・採集は容易ではない。

文献 : 佐藤, 2015. アカエノツトノミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 521.

小林義雄・清水大典, 1983. アカエノツトノミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 222, pl. 39, fig. 163.

清水大典, 1994. アカエノツトノミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 256-257, pl. 182, fig. 122.

清水大典, 1997. アカエノツトノミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 135.

宇梶清一, 2006. 日本冬虫夏草の会 25 周年記念事業 第 28 次西表島調査報告. “冬虫夏草 26 号” 日本冬虫夏草の会. 19-24.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **サキシマヤドリバエタケ**

分類 : バツカクキン科 バツカクキン目

学名 : *Cordyceps sakishimensis* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、葉上のハエに寄生したハエヤドリタケの老成した子実体上に生じ、円柱形、長さ 6~7 mm、白色、柄の先端に不実の球状体を生じるコケシ形、または先が次第に細くなって尖る。子のう殻は裸生、柄の中央部、あるいは全面に密生し、白色、卵形、500×250~260 μm、孔口部は円錐状に突

出している。二次胞子は4~6×1 μm。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県内の分布 : 西表島（固有）。
- 生 育 環 境 : イタジイ、ウラジログシなどが生育する河川流域の亜熱帯照葉樹林内の葉上で、双翅類の成虫に寄生した菌類に生じる。
- 生 育 状 況 : ハエに寄生したハエヤドリタケ (*Cordyceps dipterigena* 冬虫夏草の一種) の老成した子実体に重複寄生し、7~8月に子実体を生じるが、観察されるのは極めて稀である。
- 学 術 的 価 値 : 西表島に固有の種で、地理的分布の上で貴重である。子実体の発生は僅少のため、観察事例が少なく、生態学的な多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。
- 減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。
- 備 考 : ハエヤドリタケ (*Cordyceps dipterigena*) の老成した子実体上に重複寄生的に発生する。1971年に西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。
  
- 文 献 : 佐藤, 2015. サキシマヤドリバエタケ. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類), 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 523.  
 小林義雄・清水大典, 1983. サキシマヤドリバエタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 200, p1. 27, fig. 117.  
 清水大典, 1994. サキシマヤドリバエタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 318, p1. 297, fig. 211.  
 清水大典, 1997. サキシマヤドリバエタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 201.
  
- 執 筆 者 名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

- 和 名 : シロアリタケ
- 分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目
- 学 名 : *Cordyceps termitophila* Kobayasi et Shimizu
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)                      環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
  
- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、地中のシロアリから生じ、通常単生、まれに2個生じ、太い針形、地上部は40~130 mm、淡紅紫色をおび、結実部は柄の上半部に生じ、ツトの実型、高さ15~40 mm、径1.2~2 mm。柄は円柱形、径1~1.5 mm、先端は結実部の上に長く伸び、地中部も長い、結実部との境はやや不明瞭。子のう殻は埋生、卵形、250~270×150~160 μm、淡黄白色の地に淡黄褐色の孔口が微突出する。子のうは径8.5~10 μm。子のう胞子は75~93×3~3.5 μm。二次胞子に分裂しない。
- 分 布 域 : 南西諸島、台湾。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生 育 環 境 : イタジイ、ウラジログシなどが生育する亜熱帯照葉樹林の林床に発生する。
- 生 育 状 況 : 地中のシロアリに寄生し胸部背面、頭部、腹部から子実体を生じる。子実体は地上生で6~7月に発生する。発生は極めて稀である。
- 学 術 的 価 値 : 国内では西表島のみから知られ、地理的分布の上で貴重である。観察事例が僅少で、本種の生態に関しては多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。
- 減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。
- 備 考 : シロアリに寄生する極めて珍しい昆虫病原菌である。日本と台湾以外では記録されていない。日本では、1971年、西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。Sung et al. (2007) により、属名は変わらずノムシタケ科に移された。

- 文 献 : 佐藤, 2015. シロアリタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 525.  
 小林義雄・清水大典, 1983. シロアリタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 145, pl. 3, fig. 13.  
 清水大典, 1994. シロアリタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 314-315, pl. 290, fig. 207.  
 清水大典, 1997. シロアリタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 195.  
 Sung, G-H., N. L., Hywel-Jones, J-M. Sung, J. J. Luangsa ard, B. Sheresta ha and J. W. Spatafora, 2007. "Phylogenetic classification of Cordyceps and the clavicipitaceous fungi. Stud. Mycol., 57: 5-59.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

## 2) 絶滅危惧II類(VU)

- 和 名 : **イリオモテツブハリタケ**  
 分 類 : バツカクキン科 バツカクキン目  
 学 名 : *Cordyceps fasciculatostromata* Kobayasi et Shimizu  
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 子実体は、イラガ科の幼虫の繭から生じ、単生、または2~7個生じ、針タケ形、地上部の高さ35~45 mm、径0.6~1 mm、淡い橙黄灰色。結実部は子のう殻が柄の上半分にまばらに直接生じる。柄は繊維状の革質、基部は淡橙黄灰色でわずかに太まり、先端部は灰白色で線形にとがる。子のう殻は裸生、卵形、370~430×250~300 μm、淡橙黄白色。子のうは径3~4 μm。二次胞子は8×1.5 μm。

分 布 域 : 南西諸島。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 河川沿岸の亜熱帯照葉樹林。砂質土壌の林床に生じる。

生 育 状 況 : 鱗翅目イラガ科 (Limacodidae) の幼虫に寄生し、11月~3月に大形で硬質の繭に子実体を生じる。子実体は稀に観察される。

学 術 的 価 値 : 西表島に分布し、地理的分布の上で貴重である。また、子実体の発生が稀であるため、学術上の記録が十分なされていない。

減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。近年の採集例も知られていない。

備 考 : 1979年の冬、西表島ではじめて本種の分布が確認された。

- 文 献 : 清水大典, 1994. イリオモテツブハリタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 218-219, pl. 107.  
 清水大典, 1997. イリオモテツブハリタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 96.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄\*・寺嶋芳江

- 和 名 : **ウスキタンポセミタケ**  
 分 類 : バツカクキン科 バツカクキン目  
 学 名 : *Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は、地中のイワサキゼミの幼虫から生じ、地上生、分岐性のタンポ型、淡黄色。地上部の高さ20～50 mm。頭部は円球形または楕円形、先端は円または鈍頭形、高さ4～8 mm、径3～5 mm、淡黄色～レモンイエロー。柄は円柱形、径1.2～2 mm、淡黄白色で、肉質、頭部との境は明瞭、地中部は細根状に分岐、または直根状に宿主の虫体と繋がる。子のう殻は埋生、卵形、550～630×350 μm。二次胞子は4～5×1 μm。

分布域：東京都（八丈島）、京都府、沖縄県など。

県内の分布：西表島、石垣島。

生育環境：河川に近い亜熱帯照葉樹のイタジイ、ウラジロガシ、コミノクロツグ、リュウビンタイなどが生育する林床に生じる。

生育状況：地中のイワサキゼミの幼虫に寄生し、子実体は5～7月に幼虫の頭部、胸部背面、口器から生じる。子実体は稀に観察される。

学術的価値：西表島のウラジロガシ、スダジイ、フカノキ、モクタチバナ、オニヘゴ、リュウビンタイ、コミノクロツグの生育している林内の環境が生育に適しているらしく、本種の保護にはこの環境が重要であると考えられている。証拠標本に乏しいが、宿主の減少と発生環境の悪化が懸念されている。

減少の要因：生育地の森林伐採や地域の開発による宿主の減少が要因と考えられる。

備考：1980年に西表島からはじめて記録された。

文献：細矢 剛, 2015. ウスキタンポセミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”, 環境省（編）, ぎょうせい, 東京, 547.  
小林義雄・清水大典, 1983. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 147, pl. 4.  
清水大典, 1994. ウスキタンポセミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 181, pl. 32.  
清水大典, 1997. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 43.  
日本冬虫夏草の会編, 2014. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 114.

執筆者名：大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和名：イリオモテセミタケ

分類：バツカクキン科 バツカクキン目

学名：*Cordyceps pseudolongissima* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は、単生、または柄の上部で2～3に分岐し、地上部の高さ35～60 mm。頭部は円筒状または紡錘形、先端が円筒か鈍頭、高さ9～16 mm、径2.3～2.4 mm、新鮮なときはバラ紅色、のちに淡い褐色に変化する。柄は円柱形、ややかたい肉質、径2～2.2 mm、淡褐色、結実部との境界はやや明瞭。子のう殻は埋生、長楕円形、470～500×150～180 μm、孔口は細点状に密集する。子のうは径4 μm。二次胞子は8～11×1 μm。

分布域：南西諸島。

県内の分布：西表島。

生育環境：河川近くの亜熱帯照葉樹林。イタジイ、ウラジロガシなどが繁茂する湿り気のある林床に生じる。

生育状況：イワサキゼミ、イワサキヒメハルゼミ、ヤエヤマニイニイなどの幼虫に寄生し、5～10月に頭部から子実体を生じる。本種は発見地が限られている。

学術的価値：本種は、西表島でのみ知られる。

減少の要因：本種が稀である原因は不明である。

備 考 : 本種は1971年に西表島ではじめて採集された。沖縄島、奄美大島、屋久島、九州から知られるアマミセミタケと類似した形態を有しており、今後、精査が必要である。

文 献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 194, pl. 23, fig. 106.  
 清水大典, 1981. イリオモテセミタケ. “グリーンブックス 51 冬虫夏草”, ニューサイエンス社, 東京, 37-38.  
 清水大典, 1994. イリオモテセミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 172, pl. 14, fig. 11.  
 清水大典, 1997. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 29.  
 日本冬虫夏草の会, 2014. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 123.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和 名 : **イリオモテトルビエラクモタケ**

分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学 名 : *Torrubiella minuta* Kobayasi et Shimizu

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 本菌は、クモに寄生し、成長した白色～灰白色の菌糸が宿主の全面または腹部の一部を膜状に覆う。その菌糸膜（子座）上に直接子のう殻を生じ、柄と結実部が分化する子実体を発達しない。子のう殻は裸生、卵形、300～350×140～200 μm、白色、上部に突起状の孔口部がある。孔口部は広卵形、長さ70～90 μm、平滑、淡紅色～淡橙黄色。子のうは細く径約2 μm。

分 布 域 : 南西諸島。

県 内 の 分 布 : 西表島（固有）。

生 育 環 境 : 河川近くの亜熱帯照葉樹林内に生じる。

生 育 状 況 : 中形のクモ類に寄生し、宿主の体表に子座を生じ、6～7月に裸生の子のう殻を群生するが、発生は稀である。

学 術 的 価 値 : 本種は、西表島からのみ知られており、地理的分布の上で貴重である。採集が稀であるため、学術上の観察と記録が十分されてなく、本種の生態や分布に関する今後の研究が期待される。また、近年の採集例も知られていない。

減 少 の 要 因 : 本種が稀である要因は不明である。

備 考 : 本種は、西表島で1973年にはじめて採集された。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. イリオモテトルビエラクモタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄（監）, 山と溪谷社, 東京, 328.  
 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテトルビエラクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 262, pl. 58, fig. 233.  
 清水大典, 1994. イリオモテトルビエラクモタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 330, pl. 320, fig. 226.  
 清水大典, 1997. イリオモテトルビエラクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 221.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

和 名 : **イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ)**

分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目  
学 名 : *Torrubiella ryukyuensis* Kobayasi et Shimizu  
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 本菌は、葉巻き性のクモに寄生し、白色の菌糸を宿主の体表全面に発達させて膜状に覆う。菌糸の一部は巻きつけている葉の組織を貫き、葉の上面に白色の菌糸マット(子座)を形成し、その上に直接子のう殻を生じ、長い柄と結実部が分化する子実体を発達させない。子のう殻は裸生で群生、被針形～洋ナシ形、570～630×170～250 μm、平滑、淡褐色。子のうは径5 μm、二次胞子は4～6×1 μm。

分布域 : 南西諸島、山口県。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 亜熱帯照葉樹林内のオオバルリミノキ、マルバルリミノキ、ヤマビワソウの葉上に生じる。

生育状況 : 葉の裏側のクモの体表に寄生し、葉の組織を貫き葉の上面に子座を形成し、7～8月その上に子のう殻を生じる。稀に観察される。

学術的価値 : 本菌は稀に採集されるため、学術上の記録が十分になされていない。本種の生態や分布に関する今後の研究が期待される。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : 小林・清水(1983)はイリオモテツブクモタケの和名を用いている。本種は1971年、西表島の山地林内で初めて採集された。その後、山口県での発生が見つかった。

文献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテツブクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 258, p1. 55, fig. 225.  
清水大典, 1981. イリオモテコロモクモタケ. “グリーンブックス51 冬虫夏草”, ニューサイエンス社, 東京, 88.  
清水大典, 1994. イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ). “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 336, p1. 336, fig. 237.  
清水大典, 1997. イリオモテコロモクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 234.  
日本冬虫夏草の会, 2014. イリオモテコロモクモタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 231.

執筆者名 : 大嶺哲雄\*・盛口 満・寺嶋芳江

### 3) 情報不足(DD)

和 名 : ウスベニコップタケ  
分 類 : ベニチャワソウ科 チャワソウ目  
学 名 : *Cookeina sulcipes* (Berk.) O. Kuntze  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小型で短い柄とグラス状の子のう盤からなる。子のう盤は橙黄色、径2～4 cm、深さ7～15 mm、子実層は赤みを帯び、縁には短い白い毛がある。柄は長さ7～24 mm、幅1～3 mm。子のうは基部に尾状の付属糸がある。子のう胞子は楕円形、25～30×13～18 μm、縦に線状の刻紋があり、無色またはほぼ無色である。

分布域 : 南西諸島、中国。

県内の分布 : 西表島。

- 生育環境 : 子実体は、照葉樹林内の沢やその周辺の湿り気の多い場所で、黒色化したまだ硬い腐朽木に形成される。
- 生育状況 : 県内では西表島のみ分布が限られている。
- 学術的価値 : 本種は熱帯性の子実体で、国内では西表島のみで知られるが、情報は不足している。
- 減少の要因 : 本種の子実体は色が鮮やかで形が整っているため観賞用に山地森林の生育地から持ち出されることがある。このようなことが減少の一つの要因になっていると考えられる。
- 備考 : 子実体は、橙黄色、グラス状の形で、非常に美しい。

- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ウスベニコップタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.  
大谷吉雄, 1997. 子のう菌類. “キノコの世界 菌界4”, 朝日新聞社, 東京, 116.

執筆者名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

- 和名 : **アラゲウスベニコップタケ**
- 分類 : ベニチャワシタケ科 チャワシタケ目
- 学名 : *Cookeina tricholoma* (Mont.) O. Kuntze
- カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小型、赤みを帯びた橙黄色の杯状。子のう盤は、やや内側に反る縁を有し、半円をなすように子実層側に反り返る。径7~25 mm、深さ3~10 mm、縁や外側に長い毛がある。毛は、長さ2~3.5 mm、托髄層から出た平行な菌糸が束状に集まって形成される。柄は、長さ5~15 mm、幅2~2.5 mm。子のう胞子は、楕円形~紡錘形、25~34×12~15 μm、1~2滴の油滴を含む。子のう盤の菌組織は、寒天質を含まない。

分布域 : 南西諸島、中国。

県内の分布 : 石垣島、西表島、沖縄島。

生育環境 : 子実体は、広葉樹林内の沢や湿った林床にある倒木や落枝上に形成される。

生育状況 : 県内における観察頻度は少ない。沖縄島では一度観察されただけで、近年は確認されていない。

学術的価値 : 日本では本県のみで見られる亜熱帯性の子実体で、本種は地理的分布の上で重要である。情報が不足している。

減少の要因 : これまでに知られている本種の生育地は少ないが、その要因は不明である。

備考 : 本種の子実体には赤みを帯びた橙黄色型と黄色型がある。

- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アラゲウスベニコップタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.  
大谷吉雄, 1997. 子のう菌類. “キノコの世界 菌界4”, 朝日新聞社, 東京, 116.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・小松知晋・寺嶋芳江

- 和名 : **エダウチホコリタケモドキ**
- 分類 : マユハキタケ科 (エダウチホコリタケモドキ科)    ユーロチウム目
- 学名 : *Dendrosphaera eberhardtii* Pat.
- カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴** : 子実体は黄褐色、柄の上部で1~数回密に分岐する長さ5~17 cmの樹枝状である。各枝の先に房状の生殖器巣を形成する。子実体の基部は円柱状であるが、上部へ向かって次第に扁平になる。表面は褐色の菌糸で覆われ、浅い条線がある。柄の基部には1~数本の仮根状菌糸束が分化する。生殖器巣は球形~楕円状の不定形、長さ5~10 mm、不規則に裂開し内側は橙黄色から次第に黄土色に変わる。生殖器巣の菌糸組織のなかに球形の子のうがあり、その中に8個の子のう胞子を形成する。子のう胞子は球形、径10~15 μm、黄土色、一個の油滴がある。生殖器巣の菌糸組織は子のう胞子の成熟時に崩壊し、粉状の塊となる。
- 分布域** : 南西諸島、ベトナム、マレー半島、ボルネオ、ニューギニア。
- 県内の分布** : 沖縄島、西表島。
- 生育環境** : スダジイの老木が生育する照葉樹林内で分解・腐朽が進んだ樹木の切株および倒木の腐植、または林床の腐植層に子実体を形成する。
- 生育状況** : どの生息地においても生息密度が低く、稀少である。
- 学術的価値** : ユーロチウム目を構成する多くの種は子実体を形成しない微小菌類であるが、本種は子実体を形成する点で特色があり、独特な形態を備え、ユーロチウム目では分類・形態学的に貴重である。
- 減少の要因** : 本種の確認されている生息地が少ない要因は不明である。情報は不足している。
- 備考** : ユーロチウム目にエダウチホコリタケモドキ科を認め、その中に本種を含める研究者もある。
- 文献** : 細矢 剛, 2015. エダウチホコリタケモドキ. “環境省レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 565.  
 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. エダウチホコリタケモドキ. “山溪フィールドブックス⑩ きこのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 290.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. エダウチホコリタケモドキ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 244, pl. 140.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. エダウチホコリタケモドキ. “山溪カラー名鑑 日本のかのこ”, 山と溪谷社, 東京, 543.

**執筆者名** : 中村 直\*\*・小知知普・寺嶋芳江

- 和名** : **アミガサタケ**
- 分類** : アミガサタケ科 チャワソウタケ目
- 学名** : *Morchella esculenta* (L.: Fr.) Pers. var. *esculenta*
- カテゴリー** : 情報不足 (DD)                      **環境省カテゴリー** : 該当なし

- 形態の特徴** : 子実体は、中~大型、頭部と柄からなり、高さ5~12 cm。頭部は卵形~卵状円錐形、先端は鈍頭または鋭頭、頭部下縁は柄に直生またはわずかに隔生する。頭部の表面には、網目状に隆起したヒダがあり、小区画に分かれ、小区画のくぼみに子実層を生じる。網目状の隆起(肋脈)では縦脈がよく発達し多少平行する傾向があり、横脈はやや少ないため、くぼみは縦長のものが多く、小区画は類多角形か不整形。子実層は灰褐色。柄は、円筒形でほぼ同幅か基部はやや太く、長さは頭部とほぼ同長か短く、白色~帯黄色。頭部も柄も内部は空洞で、内壁は淡褐黄色、白粉状の顆粒がある。子のうは、円筒形、280~320×18~22 μm。子のう胞子は、楕円形、20~24×12~14 μm、平滑。胞子紋は黄色を帯びる。
- 分布域** : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、北・南アメリカ、オーストラリア、アフリカ、中国。
- 県内の分布** : 沖縄島。
- 生育環境** : 子実体は、春に森林内または森林周辺の地上に発生する。
- 生育状況** : 本種は、沖縄島中部域の2箇所の森林で観察されているが、情報は不足している。

- 学 術 的 価 値 : 子実体の形態が担子菌類に類似して頭部と柄部に分かれていることや、子実層が区切られた多くのくぼみからできていることで、本種の子実体は他の子実体の菌類と大きく異なった独特な形態を備えている。
- 減 少 の 要 因 : 本種の分布の中心が温帯～冷温帯域にあり、県内では生育地が元々少ないものと考えられるので、生育地の環境保全は重要である。
- 備 考 : 食用とされている。

- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アミガサタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 312.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1987. アミガサタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 562-563.  
 沖縄生物教育研究会, 2004. アミガサタケ. “フィールドガイド 沖縄の生きものたち”, 沖縄生物教育研究会 (編), 沖縄生物教育研究会, 那覇, 125.  
 幼菌の会, 2001. アミガサタケ. “きのこ図鑑”, 幼菌の会 (編), 家の光協会, 東京, 292.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

- 和 名 : **ニクアツベニサラタケ**
- 分 類 : ベニチャワソウタケ科 チャワソウタケ目
- 学 名 : *Phillipsia domingensis* (Berk.) Berk.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 の 特 徴 : 子実体は、小～中型、暗赤色～暗紫紅色、皿状～浅い碗形、径 2～6 cm、無柄のチャワソウタケ形である。子実層は肉質。子実層は、乾いた感じでもろく、裏面の中心付近または縁よりの広い部分で腐朽木に着生する。子実層の下面は類白色。子実層は円筒形、300～400×15～18 μm、8個の子実層胞子を内生する。子実層胞子は、等辺楕円体、20～27×10～12 μm、縦に条線があり、1～2個の油滴を含む。

分 布 域 : 本州関東以南、中国。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 本種は、照葉樹林内の湿った腐朽倒木や落枝上に子実体を生じる。

生 育 状 況 : 本種の県内生育地は沖縄島北部山林に限られる。子実体は 2～3 個が散生する。情報が不足している。

学 術 的 価 値 : チャワソウタケ科の菌類は有柄の子実体を形成するものが多いが、本種は無柄で子実体下側の中心または縁よりの広い部分で腐朽木に着生する。

減 少 の 要 因 : 本種が稀である要因は不明である。

備 考 : 本種の子実体は生の時には肉質でもろいが、乾燥するとコルク質となり容易に壊れない。

- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ニクアツベニサラタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.  
 金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

- 和 名 : **マユハキタケ**
- 分 類 : マユハキタケ科 ユーロチウム目

学 名 : *Trichocoma paradoxa* Jungh.

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小型、高木樹皮を破って生じ、初めは内外2層の被膜におおわれ、ドングリの殻斗様、後に外被膜は破れ、薄い内被膜に包まれた上部の刷毛状の基本体が柱状に伸び、高さ1~2 cm、径6~10 mm。子のうは基本体中に不規則に散らばって形成され、子のう胞子を生じた後、子のう膜は消失する。子のう胞子は、楕円形、5~8×5~6 μm、黄色のち褐色、横の線状隆起がある。

分布域 : 本州以南、北・南アメリカ、ボルネオ、セイロン、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山地のやや湿度の高い樹林内で、生育している老木の樹幹下部に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は、老木の樹幹下部の樹皮に小型の子実体を形成する。生育地は極めて狭い範囲に限られている。情報が不足している。

学術的価値 : ユーロチウム目の主体はカビで、本種を含む少数の種が比較的大きな子のう果を形成し、子実体とみなされる形態的特徴を持つ。

減少の要因 : 本県における本種の生育地は極めて少ない。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. マユハキタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 290.

今関六也・本郷次雄(編著), 1989. マユハキタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 243-244, pl. 140.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. マユハキタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 542.

宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・寺嶋芳江

## 〈担子菌類〉

### 1) 絶滅危惧I類(CR+EN)

和 名 : ヒジリタケ

分 類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目

学 名 : *Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvar den

カテゴリー : 絶滅危惧I類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧I類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、中~大型で地上生、傘は円形、肉は薄く強靱な革質、平らに開くが中央部に向かってなだらかにくぼみ、径5~10 cm、表面はビロード状で橙褐色、黄褐色~灰褐色、周辺部は淡色、同心円状に隆起する環紋と放射状の隆起がある。傘の下面は類白色で極めて微細な管孔がある。柄は8~15 cm、円柱状、クリーム色~淡黄褐色。担子胞子は楕円形。子実体は地中に形成された菌核から発達する。

分布域 : 南西諸島、フィリッピン、マレー半島、ボルネオ、ニューギニア、オーストラリア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 照葉樹林の地中に形成された菌核から子実体を生じる。

生育状況 : 石垣島および西表島における本種の生育地は限られている上に、最近では確認される子実体の数も

極めて少ない。

- 学 術 的 価 値 : 国内では八重山諸島が本種分布域の北限と考えられるため、地理的分布の上で貴重である。また、地中に形成された菌核から子実体を生じる本種の性質は、他の菌類にあまり例がなく、特徴的である。
- 減 少 の 要 因 : 森林伐採や道路の敷設などの地域開発による広葉樹原生林の減少、および森林生態系の破壊が要因と考えられる。

- 文 献 : 青島清雄・大宜味朝栄, 1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布. 国立科博専報, 7: 85-88.  
 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ヒジリタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 241.  
 環境省(編), 2015. ヒジリタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 東京, 533.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

和 名 : キアミズキンタケ

科 名 : アカカゴタケ科 スッポントケ目

学 名 : *Simblum periphragmoides* Klotzsch

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 菌蕾は類球形～卵形、白色、成熟し托が伸長すると高さ 5～10 cm、クリーム色～淡い黄色。托の上部には淡い黄色～黄色で網目・カゴ状で類球形の頭部をもつ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色～褐色。腐った果実臭を発する。

分 布 域 : 北インド洋西部のモーリシャス島で記載された種で、インド、セイロン、ジャワ島、台湾等に分布する。

県 内 の 分 布 : 石垣島。

生 育 環 境 : 夏～秋、ヤシ科植物が優占する湿潤な亜熱帯林に子実体を発生する。

生 育 状 況 : 日本では沖縄県石垣島の亜熱帯林から知られ、現存する生育地は 1 か所のみ。

減 少 の 要 因 : 日本における既存の生育地は石垣島の 1 ヶ所のみであり、すでに開発による悪影響を受けている。現在知られている発生地が今後さらに悪化することによる消滅が懸念される。

文 献 : Hosaka, K., 2010. Preliminary list of Phallales (Phallomycetidae, Basidiomycota) in Taiwan, Mem. Natl. Mus. Natl. Sci., 46, 57-64.

Hosaka, K., 2012. Preliminary list of Phallales (Phallomycetidae, Basidiomycota) in Thailand. Mem. Natl. Mus. Nat. Sci., 48: 81-89.

今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. クロハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 358.

本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. クロハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 170.

宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

小林義雄, 1938. “大日本植物誌 2 ヒメノガスター亜目及スッポントケ亜目”, 三省堂, 東京, 90pp.

大谷吉雄, 1974. 沖縄石垣島で発見されたキアミズキンタケ. 日菌報, 15: 243-244.

執 筆 者 名 : 小松知普・寺嶋芳江

## 2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

和名 : アラゲカワウソタケ

分類 : タバコウロコタケ科 タバコウロコタケ目

学名 : *Inonotus cuticularis* (Bull.) P. Karst

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 子実体は無柄、全体に褐色～黄褐色。傘は半円形、幅3～10 cm、最初表面に短毛をもつが老成すると無毛で粗面になる。傘肉は黄褐色、強靱な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。傘表面には分岐した剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短楕円形、黄褐色、6～8×4.5～5.5 μm。

分布域 : 北米および東アジア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 広葉樹枯木上に子実体を発生する。

生育状況 : 北米では普通種であるが、国内での発生は稀で数か所の暖温帯老齢林から知られている。

学術的価値 : 沖縄県を含む暖帯林からのみ観察されている。

減少の要因 : 暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

備考 : 過去の標本同定に間違いが多かった。国内での発生は数か所のみに限られる。

文献 : 服部 力, 2015. アラゲカワウソタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 557.

執筆者名 : 寺嶋芳江

---

和名 : ナンバンオオカワウソタケ

分類 : タバコウロコタケ科 ヒダナシタケ目

学名 : *Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 子実体は無柄、全体に褐色～暗褐色、傘は半円形、幅20 cmに達する。傘表面ははじめ微毛をもつが後に無毛でひびわれる。傘肉は褐色、強靱な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。管孔には剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短楕円形、褐色、5～7×3.5～5 μm。

分布域 : 南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 広葉樹枯木または生木上に重なって発生する。

生育状況 : 熱帯地域に広く分布するが、国内での発生は稀で、南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域数か所から知られている。

学術的価値 : 国内での観察例は少ない。

減少の要因 : 暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

備考 : 国内での発生はまれで、南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域の数ヶ所(神奈川県、静岡県、鹿児島県、沖縄県等)のみから知られている。

文献 : 服部 力, 2015. ナンバンオオカワウソタケ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれの

ある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”，環境省（編），ぎょうせい，東京，558.

執筆者名：寺嶋芳江

和名：ヤエヤマキコブタケ

分類：タバコウロコタケ科 タバコウロコタケ目

学名：*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は、材上に生じ、無柄～半背着生、しばしば極めて大型で多年生。傘は5～17×8～20 cm、厚さ3～6 cmの半円形で、丸山形～蹄形、表面は黄褐色～灰褐色～暗褐色、ビロード状～無毛、しばしば環紋をあらわして、ひび割れる。傘の肉は黄褐色～暗褐色で木質。孔口は灰褐色～暗褐色で、極めて微細。担子胞子は球形～楕円形。

分布域：南西諸島、アジア、アフリカ、北・南アメリカ等の亜熱帯～熱帯地方、オーストラリア。

県内の分布：石垣島、西表島。

生育環境：照葉樹林内の枯木や倒木上に子実体を形成する。

生育状況：石垣島および西表島の照葉樹林の枯木上に子実体を形成するが、確認される子実体の数は極めて少ない。

学術的価値：本県における分布地は国内における本種分布域の北限で、本種の地理的分布を把握する上で重要である。

減少の要因：森林の伐採や地域開発などによる生育場所である原生林の減少および森林生態系の破壊、また、産地が局限している。

備考：材の白色腐朽を起こす。*Phellinus* 属の熱帯における最大型種である。日本では石垣島および西表島の数ヶ所から報告されているにすぎず、その生育域は極めて狭い。八重山諸島における生育域が本種分布域の北限と考えられている。

文献：青島清雄・大宜味朝栄，1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布. 国立科博専報，7: 85-88.  
本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ヤエヤマキコブタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，268.

環境省（編），2015. ヤエヤマキコブタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”，ぎょうせい，東京，559.

執筆者名：島袋守成\*\*・寺嶋芳江

和名：ダイダイサルノコシカケ

分類：タマショレイタケ科 タマショレイタケ目

学名：*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvardeen

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は一年生～多年生で無柄～半背着生。傘は不定形～半円形でオレンジ色がかった茶色、同心円状の溝がある。傘肉はレンガ色。直径は最大20 cm、肉は厚さ2～4 cmに達する。裏面の孔口は微細、白色～薄茶色。

分布域：アジア、アフリカの亜熱帯から熱帯域、宮崎県、沖縄県。

県内の分布：西表島。

生育環境：広葉樹に発生。材の白色腐朽を起こす。

- 生育状況 : 広葉樹の老齢林に発生するが、生育条件の詳細は不明。宮崎県および西表島浦内川流域から 確認されているが、標本数は少ない。
- 学術的価値 : 宮崎県における生育域は本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する上で重要である。
- 減少の要因 : 森林の伐採や道路の敷設などの地域開発による老齢林の減少。分布は宮崎県下の 1 地域、および西表島浦内川流域と産地が局限している
- 備考 : 本種は熱帯種であり、アジアおよびアフリカの熱帯域に広く分布する。国内では 1967 年に西表島で採集された標本に基づき、1974 年に日本初産として報告され、その後宮崎県においても発見された。
- 文献 : 服部 力, 2015. ダイダイサルノコシカケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 556.  
Ryvarden, L. (1972). A critical checklist of the Polyporaceae in tropical East Africa. *Norwegian Journal of Botany*. 19: 229-238.  
青島清雄, 1988. 沖縄のサルノコシカケの種と分布. 日本菌学会第 32 回大会講演要旨集, 4.  
青島清雄・大宜味朝栄, 1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布, “国立科博専報”, 7:85-88.
- 執筆者名 : 寺嶋芳江

### 3) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名 : **オオミダレアミタケ**
- 分類 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
- 学名 : *Lenzites vespacea* (Pers.) Ryvarden
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 子実体は中・大型で、無柄、側生。傘は半円形で丸山形～蹄形、大きいもので 8×10cm。表面は類白色～淡褐色、細かい棘状の突起に覆われるものからほぼ平滑のもの、また環状の溝をもつものもある。傘の肉は白色で生時はかたくないが、乾燥すると革質～コルク質になる。傘の裏側 (子実層托) は類白色～黄土色、粗いヒダ状～迷路状の管孔まで変化がある。担子胞子は広楕円形。
- 分布域 : 本州中部太平洋岸以南、中国、台湾、タイ、ベトナム。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 照葉樹林内の湿潤な環境にある立枯れ木、倒木に側生する。
- 生育状況 : 沖縄島北部の森林から記録されているが、その生育場所は限られ、形成される子実体の数も少ない。情報が不足している。
- 学術的価値 : 日本列島では沖縄県が分布の中心になっていると思われる。地理的分布の上で興味のある種である。
- 減少の要因 : これまでに知られている本種の生育場所は限られているが、その要因は不明である。
- 備考 : 熱帯～亜熱域に分布の中心があると考えられるので、今後八重山諸島での詳しい調査が必要である。
- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. オオミダレアミタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きこのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 240.  
金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.
- 執筆者名 : 中村 直\*\*・小松知普・寺嶋芳江

和名 : スッポンタケ  
 分類 : スッポンタケ科 スッポンタケ目  
 学名 : *Phallus impudicus* L.: Pers.  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中 (大) 型で、幼菌は類白色の殻皮に包まれ、径 4~6 cm のほぼ球形で、基部に類白色の太い根状菌糸束を付ける。成熟すると幼菌上部の殻皮が裂開し、傘 (頭部) と柄が伸長し、高さ 9~15 cm になる。傘 (頭部) は円錐状鐘形、表面は白色~淡黄色で網目状の隆起があり、暗緑色の粘液化した悪臭のある基本体 (グレバ) をつけ、頂部は白色盤状で柄の上端と連なる。柄は円筒形、白色、中空で上部は泡沫状の小室が 2 層、下部は 3~4 層からなり、表面に多数の小孔が開く。柄の基部に白色~類白色の袋がある。担子胞子は長楕円形 3~5×2~3 μm。

分布域 : 北海道~南西諸島、ほぼ世界的。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 森林の腐植の多い地上に子実体を生じる。

生育状況 : 国内では広く分布している種であるが、県内では本種が確認されているのは沖縄島北部森林のみで、知られている観察地は限られ、また観察地における子実体の形成も少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 本種は胞子が成熟すると基本体が粘液状となり強い臭いを放ち、昆虫 (ハエ等) を誘引し、集まった昆虫の体に胞子を含むグレバを附着させて遠くへ分散させている。これは生態学的に興味ある特異な胞子分散様式である。

減少の要因 : 本種は広域分布種に属するが、県内での本種の観察地は少ない。しかし、県内で本種が少ない要因は明らかでない。

備考 : 傘表面のグレバを洗って取り除いた子実体を湯がいて食用に供している。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. スッポンタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 241.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. スッポンタケ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 221, pl. 136.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. スッポンタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 520-521.  
 沖縄生物教育研究会, 2004. スッポンタケ. “フィールドガイド 沖縄の生きものたち”, 沖縄生物教育研究会 (編), 沖縄生物教育研究会, 那覇, 125.

執筆者名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

和名 : サンコタケ  
 分類 : アカカゴタケ科 スッポンタケ目  
 学名 : *Pseudocolus schellenbergiae* (Sumst.) Johasen  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体の幼菌は類白色の殻皮に包まれ、径 1~2 cm の楕円球形である。成熟すると上部の殻皮が裂開し、通常 3 本 (稀に 4 本) の托枝 (腕) と円柱状の托 (柄) が伸長する。托枝は黄色~橙色~紅色、3 本はそれぞれ外側へ弓形に大きく張り、頂部で結合する。托枝の外側は 4~6 個の泡沫状の小室、内側は大きい管状泡沫の小室となる。基本体 (グレバ) は褐色~黒褐色で托枝の内側に付着し、粘液状、強い悪臭がある。托 (柄部) は淡橙色~白色、中空、常に托枝より短く、基部に殻皮がツボとして残る。ツボは下部に枝分かれした根状菌糸束を付ける。担子胞子は無色、長楕円形、4~7

×2~3 μm。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、北半球一帯、オーストラリア、ニュージーランド。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 梅雨の頃または秋に森林の腐植の多い地上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 国内では広く分布している種であるが、県内では本種の子実体が確認されているのは沖縄島北部森林の2箇所のみである。知られている観察地は少なく、形成される子実体の数も少ない。情報は不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は前記のスッポンタケと同様、胞子が成熟する頃基本体が粘液状となり強い臭いを放ち、昆虫（ハエ等）を誘引し、集まった昆虫の体に胞子を含むグレバを付着させて遠くへ分散させている。これは生態学的に特異な胞子の分散様式である。
- 減 少 の 要 因 : 広域分布種に属するが、県内での本種の観察地は少ない。少ない要因は明らかでない。
- 備 考 : 県内で見られる本種の子実体は托枝が黄色~橙色をしているものが多い。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1989. サンコタケ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，217, pl. 135.  
西銘盛光，1995. 大宜味村の担子菌類. “大宜味村の自然 大宜味村動植物調査報告書 大宜味村文化財調査報告書第4集”，大宜味村教育委員会，大宜味村，275-286.  
幼菌の会，2001. サンコタケ. “きのこ図鑑”，幼菌の会（編），家の光協会，東京，267.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・小松知普・寺嶋芳江

- 和 名 : **モミジタケ**
- 分 類 : イボタケ科 ヒダナシタケ目
- 学 名 : *Thelephora palmata* Scop.: Fr.
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT)                      環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、中型、基部の短い柄から上の方へ密に枝分かかれしてドーム状、高さ幅とも4~7 cmのホウキタケ形またはサンゴ形である。各枝は、先端近くで平たくなり、スパチュラ状またはへら形、背腹の区別はなく、革質、初め白色、次第に紫褐色~暗褐色。先端部は淡紫褐色~類白色、平滑、縦に細かく分かれて歯牙状になる場合がある。肉はコルク質、褐色、かたくて弾力性がある。担子胞子は広楕円形、8~12×7~9 μm、胞子壁に顕著な突起がある。
- 分 布 域 : 本州以南、ヨーロッパ、中国。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 照葉樹林の腐植の多い林床に子実体を単生または2~3個散生する。
- 生 育 状 況 : 沖縄島北部山林の林床から知られているが生育地は狭く限られ、形成される子実体も少ない。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は比較的にかたい子実体を形成するが、子実体を構成する菌糸は1菌糸型である点で、形態学的に特異である。
- 減 少 の 要 因 : 県内で知られている本種の生育地は狭く少ないが、その要因は不明である。
- 備 考 : 子実体は生時強い不快臭があるが、乾燥すると消失する。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. モミジタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，221.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. モミジタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，439.  
宮城元助，1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要（理学篇），2: 35-40.

執筆者名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

#### 4) 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

和名 : コンルリキュウバンタケ  
 分類 : キシメジ科 ハラタケ目  
 学名 : *Mycena lazulina* Har. Takah., Taneyama, Terashima & Oba  
 カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島)(LP) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 1-2 mm。最初半球形、後に饅頭形。表面は半透明、乾性、純白色。老成するとくすんだ淡黄色を帯び、放射状に走る明瞭な扇状の溝線を表し、周辺部は平滑またはやや白粉状。肉は極めて薄い膜質(0.1 mm 以下)、白色、特別な味や匂いはない。柄は 3-6 × 0.1-0.5 mm、ほぼ上下同大、根元は球根状にやや膨らみ小型の台状基盤を形成し、中心生。表面は白色、乾性、粉状、根本の台状基盤は径 0.3-0.7 mm、濃青色～紺色、粉状。ヒダは明瞭な襟帯を形成し、疎、白色、縁部は粉状で同色。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 6月～11月、朽ちた竹およびコミノクロツグなどのヤシ科植物に群生する。

生育状況 : 本菌は石垣島、西表島、与那国島でのみ観察されている。

学術的価値 : 発光性を示す点においても、学術的研究材料として貴重である。

減少の要因 : 希少である原因は不明である。

備考 : 菌糸体および子実体が黄緑色に発光する。

文献 : 寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. シロアリシメジ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : オオシロアリタケ(シロアリシメジ(新称))  
 分類 : キシメジ科 ハラタケ目  
 学名 : *Termitomyces eurrhizus* (Berk.) Heim (*Termitomyces intermedius* Har. Takah. & Taneyama, sp. nov. = ? *Termitomyces albuminosus sensu* Otani (1979). = ? *Termitomyces eurrhizus sensu* Hongo (1987).)  
 カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島)(LP) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は 50-90(-120) mm、最初幅の狭い円柱形のち丸山形～ほぼ平らに開き、円錐状に突出した中丘(高さ 6-12 mm)を持ち、時に中丘の周囲に小シワ状のくぼみを表し、周縁部に向かって放射状の条線を表し、しばしばヒダに沿って不規則な裂け目を生じる。縁部は最初やや内側に巻く。表面は乾性、光沢を欠き、繊維紋を放射状に表し、灰褐色～赤褐色、周縁部に向かって淡色を呈し、中央部は暗色、被膜を欠く。肉は厚さ 5 mm 以下、類白色、軟質、特別な味や臭いはない。柄は 70-130×9-20 mm、円柱形、地上部の根元に向かってやや太くなり、中心性、中実、縦に沿って条線を表す。表面は平滑または繊維状、成熟するとしばしばささくれを生じ、類白色。偽根は長さ 200 mm に達し、円柱形、下方に向かって細くなり、帯黒色。ヒダは離生、やや密、柄に到達するヒダは 30-50、小ヒダは 0-

1、幅 7 mm 以下、最初白色のち淡黄土色～淡紅色。縁部は全縁、同色。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : タイワンシロアリの巣の菌床から発生し、しばしば群生。
- 生 育 状 況 : 本菌は石垣・西表島の森林では生育地は広く、子実体の形成もよいが、近年沖縄島では極めて少なくなっている。
- 学 術 的 価 値 : 本県が分布の北限になっていて、日本の他の地域では知られてない。本菌とタイワンシロアリとの間に見られる菌類と昆虫との共生も特異な現象である。また、両者の共生による落葉落枝の分解者としての機能は、亜熱帯林における物質循環を考察する上で重要である。
- 減 少 の 要 因 : 沖縄島南部の森林域で知られているが、開発による森林伐採が生育地を狭めたと考える。美味な子実体といわれているので、乱獲も減少の要因と考えられる。
- 備 考 : 本種に *Termitomyces albuminosus* (Berk.) Heim の学名を用いた文献もある。八重山産の標本 (Otani 1979) はスリランカ産 *T. eurrhizus* と明らかに形態的特徴が異なる。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. オオシロアリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 84, pl. 18.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. オオシロアリタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 101.  
 大谷吉雄, 1979. 沖縄石垣島で採集したオオシロアリタケ. 日菌報, 20: 195-202.  
 幼菌の会, 2001. オオシロアリタケ. “きのこ図鑑”, 幼菌の会 (編), 家の光協会, 東京, 267.  
 寺嶋芳江監修・編著/高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. シロアリシメジ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.
- 執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・寺嶋芳江

## 5 ) 情報不足 (DD)

- 和 名 : タマゴタケ
- 分 類 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学 名 : *Amanita caesareoides* Lj. N. Vassiljeva
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、中・大型で、幼時白色の外被膜に覆われ卵形であるが、発達すると上部の外被膜が裂けて柄と傘が伸長する。傘はまんじゅう形から平らに開き、径 5～18 cm、中央部はしばしば丸く盛り上がる。表面は赤色～橙赤色、平滑、多少粘性があり、周辺部には放射状の明瞭な溝線がある。肉は淡黄色。ヒダは淡黄色～黄色、密で離生する。柄は 10～17×0.6～2 cm、橙色～黄色、濃色のだんだら模様があり、上部に橙色の膜質のツバがある。柄の根もとには白色の厚い膜質で袋状のツバがある。担子胞子は広楕円形～類球形、7～10×6～8 μm。
- 分 布 域 : 北海道～南西諸島、中国、ネパール、セイロン、北アメリカ (東部に多い)。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : 梅雨の頃、子実体は山地森林の林床に形成される。
- 生 育 状 況 : 分布の中心は温帯～冷温帯域にあり、県内ではその生育地は少なく、沖縄・石垣・西表島からそれぞれ一箇所ずつ知られているのみである。観察例が極めて少ない。
- 学 術 的 価 値 : 子実体は幼時長卵形の袋状の外被膜に包まれて分化するが、柄と傘が発達する際覆っていた外被膜

の上部が裂け、その裂け目を通して柄と傘が伸長するため柄の基部に袋状のツボがそのまま残存する。これはテングタケ属の子実体に見られる基本的な発達様式の一つの型であるが、本種はこの型を示す典型的な例として、形態学的に貴重である。

- 減少の要因 : 沖縄島北部の生育地では最近子実体が全く観察されなくなった。これは山地森林への人間活動の拡大が生育地の森林生態系の攪乱を招き、その結果子実体形成が阻害されているものと考えられる。
- 備考 : テングタケ属の子実体は中毒を引き起こす毒成分を含むものが多いが、食用菌である。

- 文献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. タマゴタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 74.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. タマゴタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 122, pl. 29.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. タマゴタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 150-151.  
 宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆 者 名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

- 和 名 : カブラテングタケ
- 分 類 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学 名 : *Amanita gymnopus* Corner et Bas
- カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、中・大型で、傘は初めまんじゅう形から平らに開き、径8~15 cm、後に傘の周辺部は上方に反り中央部がややくぼむ。傘の表面は粘性なく、クリーム色後黄土色を帯び、淡黄~淡褐色で薄い膜質の外被膜の破片が多数付着し、縁部にツバ (内被膜) の残片が付着することがある。肉は黄白色、傷をつけると緩やかに赤褐色に変わる。ヒダは離生、密~やや疎、黄土色、縁部は粉状。柄は9~13×1.5~2 cm、根もとはカブラ状に著しくふくらみ、径4~4.5 cm、クリーム色、ツボを全く欠く。ツバは柄の上部につき黄白色、膜質、上面に条線があり、多くは細かく破れ消失する。担子胞子は類球形~広卵形、5.5~7.5×5~6.5 μm。

- 分 布 域 : 本州関東以南、アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 子実体は、照葉樹林の腐植の多い林床に発生する。
- 生育状況 : 石垣島と沖縄島北部の照葉樹林の地上に生育することが知られている。
- 学術的価値 : テングタケ属の子実体は通常、外被膜の破片を柄の基部と傘の表面にとどめている。しかし、本種では、柄の基部の膨大部にその痕跡も認められない。この形質はテングタケ属のなかでは特徴的である。
- 減少の要因 : 県内では本種の生育地は限られている。
- 備考 : 子実体には強い臭気がある。

- 文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.  
 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. カブラテングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 328.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. カブラテングタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 132, pl. 33.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. カブラテングタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，168.

執筆者名：中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名：テンゲタケ

分類：テンゲタケ科 ハラタケ目

学名：*Amanita pantherina* (DC.: Fr.) Krombh.

カテゴリ：情報不足(DD) 環境省カテゴリ：該当なし

形態の特徴：子実体は、中・大型で、傘は平らに開き、径5～25 cm、後に中央部がややくぼむ。傘の表面は多少粘性があり、灰褐色～オリーブ褐色、全面に類白色のツボの破片が多数点在し、周辺部は淡色で放射状の溝線を現す。ヒダは、白色で密、離生する。柄は、5～35×0.6～3 cm、白色～淡黄褐色、膜質のツバを有する。基部は多少ささくれに覆われ、根もととはふくらみ、外被膜のなごりが指輪状となって付着する。担子胞子は、広楕円形、9～12×7～9 μm。

分布域：北海道～南西諸島、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ、アフリカ。

県内の分布：沖縄島。

生育環境：春または秋、リュウキュウマツの混じる照葉樹林の林床に子実体を単生、散生、または希に群生する。

生育状況：本種の分布の中心は温帯～冷温帯域にあり、亜熱帯に属する沖縄県ではその生育地は極めて少なく、沖縄島の中部と北部のそれぞれ一箇所の森林で観察されている。

学術的価値：テンゲタケ属の子実体には、袋状の外被膜の中で分化した幼形が柄と傘を発達させる際、覆っていた外被膜が脆く壊れやすく、外被膜の一部が子実体の傘の表面にいぼ状の鱗片として、また他の一部は柄の基部に付着して残存する発達様式を持つ。本種はこの型を示す典型的な例として形態学的に貴重である。

備考：本種の子実体は中毒を引き起こす強い毒成分を含んでいる。

文献：本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. テングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，71.

今関六也・本郷次雄（編著），1987. テングタケ（一名 ヒョウタケ、ハエトリタケ）. “原色日本新菌類図鑑（I）”，保育社，大阪，119-120, pl. 28.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. テングタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，145.

宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（I）. 琉球大文理紀要（理学篇），7: 54-70.

執筆者名：中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名：コテングタケ

分類：テンゲタケ科 ハラタケ目

学名：*Amanita porphyria* (Alb. & Schw.: Fr.) Secr.

カテゴリ：情報不足(DD) 環境省カテゴリ：該当なし

形態の特徴：子実体は中型。傘は平らに開き、径3～6 cm、表面は灰褐色からねずみ色、しばしば薄く平らな灰色の外被膜の破片を付着する。肉は薄く、白色。ヒダは上生ないし離生、密、白色。柄は7～9 cm×7～10 mm、上方は細く下方に向かってやや太く、基部は塊茎状に膨らみ、ツバより上部は白色、

下部には灰色の繊維状の斑紋がある。ツバは、膜質、灰色から黒褐色、上面に細かい条線を有する。ツボは白から暗灰色、大部分が柄の基部に癒着し、先端部がわずかに遊離する。担子胞子は球形で、径8~12  $\mu\text{m}$ 。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。
- 生 育 環 境 : 夏~秋、リュウキュウマツが混じるイタジイ林内の有機物の多い林床に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 沖縄島および西表島の各1箇所から知られているが、子実体は頻度少なく確認される。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 幼菌を保護していた袋状の外被膜の内側から傘と柄が伸張発達する際、柄の基部と傘の縁の間で外被膜が切れ、下部の外被膜は柄基部の膨大部に癒合し、その上端部がわずかに遊離して浅いツボを形成する。これはテングタケ属の菌類にみられる発達様式の一例であり、本種はこの発達型を示すよい例である。
- 備 考 : 子実体は、中毒症状を起こす毒成分を含む。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. コテングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 76.  
今関六也・本郷次雄(編著), 1987. コテングタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 126, pl. 31.  
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(I). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.  
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

- 和 名 : フチドリタマゴタケ
- 科 名 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学 名 : *Amanita rubromarginata* Har. Takahashi
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 傘は径が40~80 mm、ほぼ平で中央部分がやや突出し、傘の縁から中央に向かって放射線状の条線がある。傘表面は最初帯褐橙色のちに帯赤黄色で、柄は黄色地に橙色の段々模様を表し、上部に薄い膜質の帯赤橙色~帯褐橙色のツバを形成し、根元に袋状のツボがある。傘裏側のヒダは、赤橙色に縁取られる。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県 内 の 分 布 : 石垣島。
- 生 育 環 境 : スダジイとオキナワウラジロガシを中心とする照葉樹林内に発生。5~9月。
- 生 育 状 況 : 本種は、石垣島の限られた場所でのみ観察されている。
- 減 少 の 要 因 : 希少である原因は不明である。
- 備 考 : 情報が不足している。

- 文 献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. フチドリタマゴタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 594.  
保坂健太郎・細矢 剛・服部 力・吹春俊光・高橋春樹・松井英幸・種山裕一・宇野邦彦・寺嶋芳江, 2012. 2012年沖縄県石垣島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 59, 35-46.  
寺嶋芳江監修・編著/高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会,

神奈川. 6-16.

執筆者名 : 小松知普・寺嶋芳江

和名 : **チャタマゴタケ**

分類 : テングタケ科 ハラタケ目

学名 : *Amanita similis* Boedijn

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、暗褐色～帯褐オリーブで周辺部は帯紅色、帯黄色、または蜜色、周辺部に条線を有する。ヒダは類白色、縁は黄色、縁部の細胞はこん棒形、楕円形、洋梨形など。柄は、黄色の地に橙色または帯褐色のだんだら模様を有し、基部に類白色の膜質袋状のツボがある。ツバは帯紅橙色～帯褐色。担子胞子は、広楕円形、7～11×5～8  $\mu\text{m}$ 。

分布域 : 本州中部以南、ジャワ島、ボルネオ島、マレーシア、シンガポール。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 梅雨と秋季に、主としてリュウキュウマツの混交する照葉樹林の有機物の豊富な地上に子実体を形成する。

生育状況 : 県内では沖縄島北部の照葉樹林内で観察されているが、生育地は少ない。

学術的価値 : 沖縄島が県内唯一の本亜種の分布地であり、地理的分布の上で重要である。菌根性である。

備考 : タマゴタケの亜種とみなされ、外形は基準亜種とほとんど同様であるが、色彩が著しく異なる。これを独立種 *Amanita similis* Boedijn とする研究者もある。

文献 : 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. チャタマゴタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 122, p1. 29.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. チャタマゴタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 153.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : **ヘビキノコモドキ**

分類 : テングタケ科 ハラタケ目

学名 : *Amanita spissacea* Imai

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、平らに開き、径 4～13 cm、後に皿形となる。表面は、帯褐灰色～暗灰褐色、多少繊維状、最初は黒褐色粉質の小さいぼ (外被膜) が密集、連続しているが、傘が開くにつれてひび割れ、大小の集団となって散在する。肉は白色。ヒダは離生状に多少垂生し、白色で密。縁部は粉状に縁取られる。柄は 5～15 cm×8～15 mm、根元は球根状にふくらみ、径 2～3 cm、灰～灰褐色で繊維状細鱗片に被われ、ツバより上はだんだら模様となり、中実。ツバは灰白色、膜質、縁は黒褐色粉状。柄基部の膨大部には、壊れた粉質～綿質のツボが環状に残る。担子胞子は広楕円形～類球形。

分布域 : 北海道～南西諸島、アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、マツ・シイ・カシ林等の地上に子実体を形成する。

- 生育状況 : 沖縄島北部と西表島のイタジイ林から知られているが、子実体の確認頻度は低い。情報が不足している。
- 学術的価値 : テングタケ属の中でツボの外被膜が傘の表面に最も密に付着する形態を有する。
- 備考 : 子実体は胃腸および肝臓に障害をもたらす毒性を有する。

- 文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.
- 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ヘビキノコモドキ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 78.
- 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ヘビキノコモドキ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 129, p1. 32.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ヘビキノコモドキ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 164-165.
- 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (I). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

- 和名 : シロオニタケ
- 分類 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学名 : *Amanita virgineoides* Bas
- カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型で、傘は平らに開き、径9～15 cm、縁には白色の外被膜の破片を付着することがある。傘の表面は粘性を欠き、白色、微粉と高さ1～3 mmの錐状のイボが多数付着するが、脱落することもある。ヒダは離生し、やや密、白色のちクリーム色、縁は粉状。柄は12～22 cm×15～22 mm、基部は棍棒状に膨らみ、径3～5 cm、上方に向かって細く、表面は白色、綿質の細かい鱗片におおわれ、上方は綿質または膜質のツバをつける。ツバは上部表面に条線があり、脱落的性。柄基部には三角錐状のイボが不完全な輪を形成する。担子胞子は長楕円形で、8～11×6～8 μm。

- 分布域 : 本州以南、アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
- 生育環境 : 夏～秋、イタジイ林内の有機物の豊富な林床に子実体を生じる。
- 生育状況 : 西表島東部と沖縄島北部の山林から知られている。情報が不足している。
- 学術的価値 : 本種はテングタケ属のテングタケに類似した子実体の発達様式を示す。幼時保護していた袋状の外被膜の破片が三角錐状の突起となって、傘の上部に形成される典型的な形質を示す。
- 備考 : 子実体は胃腸系および神経系の中毒症状を起こすと言われている。

- 文献 : 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. シロオニタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 133-134, p1. 34.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. シロオニタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 170-171.
- 宮城元助, 1967. 沖縄島産マツタケ目について (II). 琉球大文理紀要 (理学篇), 10: 38-45.
- 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (I). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヌメリアシナガイグチ(アキノアシナガイグチ)  
 分類 : イグチ科 イグチ目  
 学名 : *Aureoboletus viscosus* (C.S. Bi & Loh) G. Wu & Zhu L. Yang  
       = *Aureoboletus liquidus* Har. Takah. & Taneyama  
       = *Boletellus viscosus* C.S. Bi & Loh  
       = *Boletellus longicollis* sensu Hongo  
 カテゴリー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 子実体は中型。傘は赤褐色で、多くのしわがあり、多量の粘液に覆われる。孔口は淡黄色、後に暗オリーブ色になり、変色性はない。柄は長く、粘液に被われ、傘より淡色で縦に条線がある。ツバは広くて白色、時に柄の中ほどにつく。管孔は上生～湾生し、淡黄色、後に暗オリーブ色、孔口も同色。肉は淡黄色、傘の表皮下は淡紅褐色。

分布域 : 本州中部以南、中国。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ林の林床地上に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は沖縄・石垣・西表島から知られているが、生育地は狭く限られ、確認される子実体の数も少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 傘と柄が粘液に被われ、柄の上部に粘性膜質のツバがあり、形態学的に独特な形質を持つ。

備考 : 1982年に西表島で最初に採集され、後に広島県で採集された標本に基づき、和名に「安芸の(アキノ)」の名が付けられたと言われている。

文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.

本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アキノアシナガイグチ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 169.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アキノアシナガイグチ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 354.

Bi ZS, Lu DJ, Zheng GY (1982) Basidiomycetes from Dinghu Mountain of China. II. Some species of Boletaceae (1). *Acta Bot Yunnanica* 4:55-64.

Wu G, Li Y, Zhu X, Zhao K, Han L, Cui Y, Li F, Xu J, Yang Z-L (2016) One hundred noteworthy boletes from China. *Fungal Div.* 81:25-188.

<https://doi.org/10.1007/s13225-016-0375-8>

寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. ヌメリアシナガイグチ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ナガエノウラベニイグチ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Boletus quercinus* Hongo

カテゴリー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : アワタケ  
 分類 : イグチ科 イグチ目  
 学名 : *Boletus subtomentosus* L.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型で、傘はまんじゅう形からほぼ平らに開き、径3～10 cm。表面はビロード状、黄褐色～褐色を帯びるオリーブ色、ひび割れて黄色の肉を露出するものもある。肉は類白色～淡黄色、切断すると青変する場合がある。管孔は緑黄色、傷がつくとやや青色を帯びる。孔口はやや大形で多角形。柄は5～12×0.5～1 cm、表面は淡黄～淡褐色、ほぼ平滑～粉状で、しばしば上部にやや隆起した縦すじがある。担子胞子は楕円状紡錘形 12～14×4～5 μm。胞子紋はオリーブ色。

分布域 : 北海道～南西諸島、北半球一帯。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 梅雨または秋、イタジイ林内の地上に子実体を単生～散生する。

生育状況 : 県内では西表島と沖縄島北部の森林から知られている。情報が不足している。

学術的価値 : イグチ類には傷を付けると変色するものがあるが、本種は黄色の管孔面が著しく青く変色する。子実体の変色性を示す材料となる。

備考 : 食用に供される。

文献 : 今関六也・本郷次雄(編著), 1989. アワタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 17, pl. 75.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 310.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメウグイスイグチ  
 科名 : イグチ科 イグチ目  
 学名 : *Boletus viridis* (Heinem. & Gooss.) Corner  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : クロニクイロアナタケ  
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
 学名 : *Chaetoporus hypobrunneus* (Petch) Aoshima  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : キアブラシメジ  
科名 : フウセンタケ科 ハラタケ目  
学名 : *Cortinarius vibratilis* (Fr.) Fr.  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. キアブラシメジ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 259.  
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者 : 小松知普

---

和名 : ムニンヒメチャヒラタケ  
科名 : アセタケ科 ハラタケ目  
学名 : *Crepidotus uber* (Berk. & Curt.) Sacc.  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

---

和名 : アケボノホウロクタケ  
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
学名 : *Daedalea aurora* (Ces.) Aoshima  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

---

和名 : ナンバンウチワタケ  
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
学名 : *Daedaliopsis scopulosa* (Berk.) Aoshima  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

---

和名 : トゲオシロイタケ  
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
学名 : *Echinoporia hydnophora* (Berk. et Br.) Ryvarden  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

---

和名 : キイボカサタケ

分 類 : イッポンシメジ科 ハラタケ目  
 学 名 : *Entoloma murrayi* (Berk. & M. A. Curtis) Sacc.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小～中型。傘は、円錐形～円錐状鐘形、径 1.5～6 cm、中央に細い円柱状または小さい乳首状の顕著な突起を有し、黄色、湿っているとき周辺部に条線を示す。ヒダは、幅広く、直生～上生、やや疎、黄色、胞子が成熟すると肉色を帯びる。柄は、円筒状、3～10cm×2～4 mm、黄色、表面は繊維状でしばしばねじれがあり、中空。担子胞子は四角形（六面体）、径 10～13 μm。

分布域 : 本州以南、東アジア、ボルネオ、北アメリカ東部。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 春、梅雨、または秋季、森林の地上に子実体を単生または散生する。

生育状況 : 観察例は少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 子実体の傘中央に円筒状～乳頭状の突起があり、これは他の種では見られない本種独特の形質である。

備考 : 温帯域では単生～群生すると記載されているが、県内では群生は観察されてない。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. キイボガサタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 136.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. キイボガサタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 260, p1. 67.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. キイボガサタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 279.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : **コンイロイッポンシメジ**  
 分 類 : イッポンシメジ科 ハラタケ目  
 学 名 : *Entoloma subnitidum* S. Imai  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型で、傘は幼時円錐形からまんじゅう形、成長すると中高の平らになり、径 3～7 cm。表面にはしばしば放射状の浅いしわを生じ、青黒色。ヒダは、上生、湾生、またはほとんど離生、幼時白色、次第に肉色を帯びる。柄は、円柱状で、4～10cm×4～10 mm、基部に向かってわずかに太くなり、表面は傘とほぼ同色、繊維状の条線を有する。担子胞子は五～六角形で、10～12×6～10 μm。

分布域 : 本州以南。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、リュウキュウマツの混じった照葉樹林の地上に子実体を生じる。

生育状況 : 西表島南部と沖縄島北部の山林の地上から確認されている。情報が不足している。

学術的価値 : 子実体の胞子は一般に球形、卵形、楕円形であるが、本種を含むイッポンシメジ属の胞子は角形をしている点で、形態的に他の菌群とは異なる独特な形質を持つ。

備考 : イッポンシメジ属の種には有毒な種もあるが、本種は無毒で食用になると言われている。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. コンイロイッポンシメジ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 139.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. コンイロイッポンシメジ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 263, pl. 68.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. コンイロイッポンシメジ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 281.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : **アミヒカリタケ**

分類 : クヌギタケ科 ハラタケ目

学名 : *Favolaschia manipularis* (Berk.) Teng

カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小型で。傘は、初めまんじゅう形、後にやや平らとなり、径1~3 cm。傘の表面は平滑で粘性はなく、幼時は暗灰色、成長するに従って次第に淡色となり、類白色、乾燥するとほとんど白色になる。傘の裏面は管孔から成る。管孔は多少放射状に並び、白色、直生から上生して柄につく。柄は細い円柱状で、1.5~4 cm×1~2 mm、表面は淡灰色から白色、粉状、中空。孢子紋は白色。担子孢子は卵形で、6~9×5~6 μm。

分布域 : 本州中南部以南、インドネシア、ミクロネシア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 本種は沖縄島ではほぼ1年中、山地の林床にある倒木や枯木の上に子実体を群生または束生する。

生育状況 : 県内では3島から知られているが、各島における本種の生育場所は限られている。倒木から年に数回(1~3ヶ月に1回程度)子実体が発生している。情報が不足している。

学術的価値 : 本菌は顕著な発光性がある点で興味深い。柄部が特に強く発光する。

減少の要因 : 県内における本種の生育場所は少ない。本種が発生する倒木が昆虫採集により破壊される、あるいは倒木等が持ち去られたことが見られた。開発や皆伐等の人為的な攪乱の影響を受けていないか調べる必要がある。

備考 : 本種はクヌギタケ科に属する子実体であるが、子実層はヒダではなくイグチ類の子実体と同様に管孔である。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アミヒカリタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 66.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. アミヒカリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 112, pl. 26.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. アミヒカリタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 137.  
 宮城元助, 1960. 発光茸 *Filoboletus manipularis* に関する二, 三の観察. 琉球大文理紀要 (理学篇), 4.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.  
 金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : オオスルメタケ  
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
 学名 : *Fomitella rhodaphaea* (Lév.) Aoshima  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58, 21-28.  
 宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 小松知普

和名 : シママンネンタケ  
 科名 : マンネンタケ科 ヒダナシタケ目  
 学名 : *Ganoderma boninense* Pat.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. シママンネンタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 257.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. シママンネンタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 485.  
 宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 小松知普

和名 : コゲイロカイガラタケ  
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目  
 学名 : *Gloeophyllum abietinum* (Fr.) Karst.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : オウギタケ  
 分類 : オウギタケ科 イグチ目  
 学名 : *Gomphidius roseus* (Fr.) Karst.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型で、傘は、幼時類円錐形～丸山形で、成長すると径 3～6 cm の浅いじょうご形になる。表面は、湿っているときゼラチン質で粘性があり、淡紅色、古くなると黒いしみを生じる。ヒダは、やや疎、幼時灰白色、後に緑を帯びた暗灰褐色。柄は 3～6 cm×6～10 mm、基部に向かってやや細くなり、上部に綿毛状の不完全なツバを有する。表面は上部が白色、下部は淡紅色～淡紅褐色。担子胞子は長楕円形～類紡錘形で、15～19×5～6 μm。胞子紋はほぼ黒色。

分 布 域 : 本州以南、アジア、ヨーロッパ。  
県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。  
生 育 環 境 : 夏～秋、リュウキュウマツの混じった照葉樹林の地上に子実体を単生または散生する。  
生 育 状 況 : 石垣島オモト岳と沖縄島南部で知られていた。その後、西表島と沖縄島の北部山林でも観察されたが、逆に沖縄島南部では観察されなくなった。情報が不足している。  
学 術 的 価 値 : 本種は樹木の根に菌根を形成し、互いに栄養のやり取りを行う共生現象があると言われている。  
備 考 : 温帯域では普通の種であるが、本県では子実体の観察例は少ない。食用となる。

文 献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1987. オウギタケ. “原色日本新菌類図鑑（I）”，保育社，大阪，271-272, pl. 69.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. オウギタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，294-295.  
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

---

和 名 : **ムニンキヤマタケ**  
科 名 : スメリガサ科 ハラタケ目  
学 名 : *Hygrocybe miniatostrata* (S. Ito et Imai) S. Ito  
カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 絶滅(EX)

文 献 : 宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執 筆 者 名 : 小松知普

---

和 名 : **ムジナタケ**  
分 類 : ナヨタケ科 ハラタケ目  
学 名 : *Lacrymaria lacrymabunda* (Bull.) Pat.  
カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 傘は、小型～中型で径3～6 cm、茶褐色～帯黄褐色、表面は粘性なく繊維状鱗片に覆われ、周辺部に白色の繊維毛がある。ヒダは、暗紫褐色で、ややまだら状、縁は白く縁どられる。柄は3.5～7 cm、褐色の鱗片に覆われる。ツバは、白色、綿毛状、のち胞子の落下によって帯黒色となる。担子胞子、レモン形、9～12×6～8 μm、黒色、いぼで覆われる。

分 布 域 : 北海道～南西諸島、北半球に分布。  
県 内 の 分 布 : 沖縄島。  
生 育 環 境 : 夏～秋、林内の地上に子実体を形成する。  
生 育 状 況 : 沖縄島北部の山地林内の地上に散生または群生することが確認された。情報は少ない。  
学 術 的 価 値 : 沖縄島で確認され、地理分布上貴重である。  
備 考 : 食用価値は低い。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ムジナタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”，本郷

次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 102.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ムジナタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 174, p1. 45.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ムジナタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 211.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : カラハツモドキ

科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius insulsus* (Fr.) Fr.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文 献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和 名 : オガサワラハツタケ

科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius ogasawarashimensis* S. Ito & Imai

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)

執筆者名 : 根田 仁

和 名 : ツチカブリ

分 類 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius piperatus* (Scop.: Fr.) S. F. Gray

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型。傘は、初めくぼんだまんじゅう形、後に開いてじょうご形となり、径 4～18 cm。表面は粘性が無く乾燥し、多少しわがある。色は白色、後に淡黄色で、しばしば汚黄～汚黄褐色のしみができる。ヒダは多少垂生し、クリーム色、極めて密で幅が狭く、二分枝する。柄は円柱状で、3～9×1～3 cm、通常根元はやや細く、白色、質は堅い。傷つくと白色の乳液を多量に分泌し、味は極めて辛い。担子胞子は広卵円形～類球形で 5～8×5～7 μm、微細ないぼと細い線がある。

分布域 : 北海道～南西諸島、北半球一帯、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ等の広葉樹林またはリュウキュウマツの混生する林内の地上に生じる。

生育状況 : 宮城 (1964, 1971) は本種を沖縄島北部と西表島から報告している。その後の調査では両島における本種の観察地は狭く限られている。情報が不足している。

学術的価値 : チチタケ属の子実体はヒダを傷つけると乳液を分泌する性質がある。本種は白色の乳液を多量分泌するので、この特徴をよく表している。

- 備考 : 細かく刻み、よく洗うと食べられると言われる。しかし、本種の乳液は非常に辛味が強く、嘔吐を  
起こすこともあるので注意を要する。
- 文献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1989. ツチカブリ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，  
62.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ツチカブリ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山  
と溪谷社，東京，378-379.  
宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（Ⅰ）. 琉球大文理紀要（理学篇），7: 54-70.  
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7:  
33-37.

執筆者名 : 西銘盛光\*・中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

- 
- 和名 : ケガワタケ  
分類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目  
学名 : *Lentinus squarrosulus* Mont.  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 子実体は中（大）型、傘は中央がくぼんだまんじゅう形～ロート形、径3～8 cm、やや革質、縁は  
初め内側に巻くが、後広がり、しばしば不規則に波打つ。傘は、白～クリーム色、初め圧着した繊  
維状の鱗片で密に覆われる。鱗片は、灰褐色～黒褐色、傘が開くにつれて周辺部は散在する。肉は  
薄く、白色。ヒダは、垂生し、密、白色、後やや黄色、幅は狭く2～5 mm、縁は成熟するにつれて  
鋸歯状となる。柄は、3～5×0.5～1.5 cm、中心生～偏心生、白色または基部に向かって褐色となり、  
細かい鱗片を散在しているが、古い子実体ではほぼ滑らかとなる。ヒダとの境界付近に白色、繊維  
状のツバをもつが、ツバは消失しやすい。担子胞子は、円柱形、6～8×2～3 μm。胞子紋は白色。
- 分布域 : 九州以南、世界の熱帯から温帯域。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 本種は森林の日の当たる場所にある倒木または切株に子実体を生じる。
- 生育状況 : 本種の子実体は群生する傾向がある。情報が不足している。
- 学術的価値 : ハラタケ目の菌類は通常1菌糸型であるが、本種の子実体は2菌糸型である点で分類・形態学上特  
異である。
- 減少の要因 : 熱帯から温帯にかけて広く分布している種であるが、県内では本種の確認は少ない。本種の確認頻  
度が少ない原因は不明である。
- 備考 : 本種に対して *Lentinus tigrinus* (Bull.: Fr.) Fr. の学名を用いている研究者もいる。
- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ケガワタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷  
次雄（監），山と溪谷社，東京，13.  
今関六也・本郷次雄（編著），1987. ケガワタケ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅰ）”，保育社，大阪，  
31, pl. 1.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ケガワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山  
と溪谷社，東京，26.  
保坂健太郎・細矢 剛・服部 力・吹春俊光・高橋春樹・松井英幸・種山裕一・宇野邦彦・寺嶋芳  
江，2012. 2012年沖縄県石垣島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報  
告，59  
細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江，2011.  
西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告，58.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : **カエンオチバタケ**

科 名 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Marasmius opulentus* Har. Takahashi

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和 名 : **ヒロヒダタケ**

分 類 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Megacollybia clitocyboidea* R. H. Petersen, Takehashi & Nagas.

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、中・大型で、傘は開いて平らとなり、径5~15 cm、後に中央がややくぼむ。表面は灰色、灰褐色、黒褐色などで、放射状の繊維紋がある。ヒダは湾生し、幅広く疎、白色。柄は、7~12×1~2 cm、丈夫でかたく、表面は繊維状、根元に白色の菌糸束がある。担子胞子は広楕円形、7~10×5~8 μm。

分布域 : 北海道~南西諸島、北半球暖温帯以北。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏~秋、広葉樹林の腐木またはその近くに生じる。

生育状況 : 県内では沖縄島北部山地森林の一箇所のみで観察されている。

学術的価値 : 本種は、県内では沖縄島だけ観察されており、地理的分布の上で重要である。

備考 : 従来食用とされたが、米国で中毒の報告がある。

文 献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ヒロヒダタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 57.

今関六也・本郷次雄(編著), 1987. ヒロヒダタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 98-99, p1. 22.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ヒロヒダタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 117.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : **ウスムラサキヒラタケ**

科 名 : アセタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Melanotus eccentricus* (Murr.) Singer

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

---

和名 : コガネハナガサタケ  
科名 : クヌギタケ科 ハラタケ目  
学名 : *Mycena auricoma* Har. Takahashi  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

---

和名 : ネットイヌメリタケ  
分類 : タマバリタケ科 ; ハラタケ目  
学名 : *Oudemansiella canarii* (Jungh.) Höhnelt  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小～中型。傘は、平らに開き、径3～7 cm、表面に粘性があり、白色～淡黄白色または淡灰褐色、通常被膜の破片を付着する。肉は白色で柔軟。ヒダは、白色、直生～上生、厚く疎。柄は、3～8 cm×4～9 mm、白～淡灰褐色、ツバを欠き、基部は球根状にふくらむ。担子胞子は、球形～類球形、径18～28 μm、厚膜である。

分布域 : 小笠原、南西諸島、アジア、北・南アメリカ、アフリカの熱帯～亜熱帯。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 本種は、湿り気が多い低地林内の樹木の腐植化が起こった部分や立枯れ木に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は、沖縄島、石垣島および西表島の低地林で観察されているが、3島における観察地はそれぞれ1～2箇所と限られている。情報が不足している。

学術的価値 : 本種は熱帯～亜熱帯性の子実体で、国内では南西諸島と小笠原のみで知られ、地理分布上貴重である。

備考 : 本種は食用に供することができる。

文献 : 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58 : 21-28.  
本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ネットイヌメリタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 55.  
今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ネットイヌメリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 97, pl. 22.  
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.  
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

---

和名 : カワキタケ  
分類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目  
学名 : *Panus conchatus* (Bull.) Fr.  
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴** : 傘は、中・大型、径4~10 cm、うす形~ロート形で、上から見るとほぼ円形~腎臓形、縁は内側に巻き不規則に波打つ。傘の表面は初め微毛を帯びるが、のち平滑、帯紫褐色~黄褐色。ヒダは、垂生し、傘と同色~淡黄褐色。柄は中心性~側生、太く短く、強靱、細軟毛を密生する。担子胞子は、円柱形、6~8×2.5~3 μm。胞子紋は白色。
- 分布域** : 国内では比較的まれ。アジア、北アメリカ。
- 県内の分布** : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境** : 夏~秋、山地林内の広葉樹、ときに針葉樹の枯幹や切株上に子実体を形成する。
- 生育状況** : 沖縄島および石垣島のそれぞれ一箇所の森林の立枯れ木や切株から知られているが、最近では観察されてなく、県内における本種の生育地は稀である。情報が不足している。
- 学術的価値** : 国内における分布域は狭く、本種の地理的分布を考察する上で重要である。
- 減少の要因** : 本種の子実体の確認が少ない要因は不明である。
- 備考** : 材の白色腐朽を起こす。

- 文献** : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. カワキタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 14.  
今関六也・本郷次雄(編著), 1987. カワキタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 31-32, pl. 2.  
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

**執筆者名** : 島袋守成\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

- 和名** : **ヒメヒガサヒトヨタケ**
- 分類** : ナヨタケ科 ハラタケ目
- 学名** : *Parasola plicatilis* (Curtis) Redhead, Vilgalys & Hopple
- カテゴリー** : 情報不足(DD)                      **環境省カテゴリー** : 該当なし

- 形態の特徴** : 子実体は小型で、傘は卵形~円柱形からまんじゅう形となり、後に平らに開き、径1.5~2.5 cm、中央部は円盤状にくぼむ。表面は初め黄褐色~栗褐色、後、灰色となり、中央部は黄土色、顕著な放射状の長い溝線を形成し、扇面のヒダ状となる。ヒダは隔生、やや疎、初め類白色から淡褐色、次いで殆ど黒色へと変わる。傘の液化性はあまりない。柄は、円柱状、長さ4~7 cm、淡灰褐色、基部へ向かってわずかに太くなり、色は濃くなる。担子胞子の表面観は広卵形で、側面観は楕円形、12~15×10~12×7~8 μm、黒褐色、発芽孔がある。
- 分布域** : 北海道~南西諸島、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ。
- 県内の分布** : 沖縄島。
- 生育環境** : 本種は森林周辺部の地上に子実体を形成する。
- 生育状況** : 沖縄島北部の草地と中部の森林の林縁部地上でそれぞれ一度子実体が観察された。
- 学術的価値** : 県内では沖縄島で生育することが確認されている。情報が不足している。
- 備考** : 温帯域では路傍や芝生にも子実体を生じる普通種である。

- 文献** : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ヒメヒガサヒトヨタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 100.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ヒメヒガサヒトヨタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 208.  
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(I). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : アナタケモドキ

科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目

学名 : *Porogramma calceum* (Sacc.) Lowe

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 寺嶋芳江

和名 : オガサワライタチタケ

科名 : ナヨタケ科 ハラタケ目

学名 : *Psathyrella boninense* (S. Ito & Imai) S.Ito

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 絶滅(EX)

文献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁、小松知普

和名 : ホオベニシロアシグチ

分類 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Pseudoastroboletus valens* (Corner) Yan C. Li & Zhu L. Yang

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、中～大型で、5～13 cm、表面は灰褐色、初めやや綿毛状、のちほぼ無毛となり、湿ると多少粘性を帯びる。傘の裏側にある管孔は上生～ほぼ離生し、初め白色のち淡紅色となる。孔口は管孔と同色、傷つくと褐色に変わる。柄は白～帯淡紅色、のち基部付近に黄色のしみを生じ、表面には隆起した粗い網目模様がある。担子胞子は類紡錘形、11～16×4～6 μm。胞子紋は鈍い肉桂色。

分布域 : 本州関東以南、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ林内の林床に子実体を形成する。

生育状況 : 本県の分布は、沖縄島に限られる。

学術的価値 : 現在、本県では沖縄島が県内唯一の生息地で、地理的分布の上で貴重種である。

減少の要因 : 情報が不足している。

備考 : 傘の裏面管孔部に傷をつけると褐色に変色する。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ホオベニシロアシグチ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 163.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. ホオベニシロアシグチ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 39, p1. 80.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ホオベニシロアシグチ. “山溪カラー名鑑 日本きのこ”, 山と溪谷社, 東京, 337.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : サケバタケ

分 類 : イチョウタケ科 イグチ目

学 名 : *Pseudomerulius curtisii* (Berk.) Redhead & Ginns

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小～中型。傘は、半円形からじん臓形または扇形で、径 2～5 cm、縁は強く内側に巻き、表面はほぼ無毛から多少フェルト状で黄色。傘の肉は淡黄色で、新鮮なときは特有の不快臭がある。ヒダは、やや密に放射状に配列するが、著しく縮れるか、ほぼ規則的に数回分岐し、側面に顕著な縦じわを有し、黄色または橙黄色で、古くなるとややオリーブ色を帯びる。柄は無い。担子胞子は楕円形から円柱形、3～4×1.5～2 μm、しばしば一方にやや湾曲する。胞子紋はオリーブ黄色。

分布域 : 本州中部以南、ソ連極東地方、中国、北アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、マツその他の針葉樹の材上に単生または重なり合って子実体を生じる。

生育状況 : 宮城 (1964) は本種を沖縄島北部の山地森林から報告している。その後の調査で西表島東部の山林にも分布していることが報告された。情報が不足している。

学術的価値 : 県内では主としてリュウキュウマツの枯木や倒木を腐朽させる。セルロースを分解し材の褐色腐れを起こす性質を持つので、生理・生態学上興味深い。

備考 : 食用に不適であるといわれている。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. サケバタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 141.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. サケバタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 267, p1. 69.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. サケバタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 289.

宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.

執筆者名 : 西銘盛光\*・中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : キアミアシイグチ

分 類 : イグチ科 イグチ目

学 名 : *Retiboletus ornatipes* Manfr. Binder & Bresinsky

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型～大型。傘は、まんじゅう形から平らに開き、径 4.5～8 cm、表面には粘性がなく、ややピロッド状、黄褐色から褐オリーブ色。傘の肉は、固くしまり、黄色、空気に触れると徐々に濃黄色になる。傘の裏は管孔、上生か直生、または多少垂生し、黄色、傷つくと濃黄色になる。柄は円柱状、上部と下部はほぼ同幅で 5～11×0.6～3 cm、かたくしまるが折れやすい。表面は傘と同色でやや粉質、多少翼状に隆起した網目模様を有する。基部は白色の菌糸で覆われ、その菌糸に傷をつけると橙黄色に変色する。担子胞子は円柱状～類紡錘形、11～13×3～5 μm。胞子紋はオリ

ブ褐色。

- 分 布 域 : 北海道～南西諸島、中国、ロシア沿海州、北アメリカ東部。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島。
- 生 育 環 境 : 夏から秋、イタジイ林内のリターの多い地上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 県内では1971年に石垣島から本種が報告された。以後、沖縄島北部の森林で単生している子実体が観察された。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は、柄の表面に顕著な網目状の隆起を有する点で、イグチ類のなかでも形態的に特異な種群の一つである。
- 備 考 : 日本では以前 *Pulveroboletus retipes* (Berk. & Curt.) Sing. の学名で知られていた。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. キアミアシイグチ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 156.  
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. キアミアシイグチ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 28, p1. 77.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. キアミアシイグチ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 325.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.
- 執 筆 者 名 : 西銘盛光\*・中村 直\*\*・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

- 和 名 : **ウスムラサキハツ**
- 科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目
- 学 名 : *Russula lilacea* Quél.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー: 該当なし
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ウスムラサキハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 178.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 2011. ウスムラサキハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 370.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.
- 執 筆 者 名 : 根田 仁・小松知普

- 和 名 : **クロハツ**
- 科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目
- 学 名 : *Russula nigricans* (Bull.) Fr.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD)                      環境省カテゴリー: 該当なし
- 文 献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 2011. クロハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 358.  
 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. クロハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 170.
- 執 筆 者 名 : 寺嶋芳江

和名 : ヤマブキハツ  
 科名 : ベニタケ科 ベニタケ目  
 学名 : *Russula ochroleuca* (Pers.) Fr.  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : イロガワリベニタケ  
 科名 : ベニタケ科 ベニタケ目  
 学名 : *Russula rubescens* Beardslee  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. イロガワリベニタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 174.  
 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58, 21-28.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. イロガワリベニタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 360.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和名 : オキナクサハツ  
 分類 : ベニタケ科 ベニタケ目  
 学名 : *Russula senecis* Imai  
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘の径は5~10 cm、中央部はくぼむ。表面は黄土褐色~汚黄土色で著しいしわがあり、周辺部には放射状の溝線がある。ヒダは汚白色、縁部は褐色~黒褐色に縁取られる。肉は多少臭気があり、味は辛い。柄は長さ5~10 cm、汚黄色の地に褐色~黒褐色の細点がある。担子胞子は球形で、径7.5~9  $\mu$ m、表面に大小のとげと翼状の隆起がある。

分布域 : 北海道~南西諸島、中国、東アジア、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 夏~秋、広葉樹林やイタジイ林床の地上に子実体を形成する。

生育状況 : 県内では沖縄・石垣・西表の各島から知られているが、それぞれの島における観察例は少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 本種の担子胞子は胞子の表面に独特な大小のとげと翼状の隆起をそなえた形態的特徴がある。

備考 : 本種は不快臭と辛味があり、食用に不適。生食すると、中毒症状(嘔吐、腹痛、下痢などの胃腸系の中毒)を起こすと言われている。

文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.

今関六也・本郷次雄（編著），1989. オキナクサハツ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，50，p1. 83.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. オキナクサハツ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，362.  
宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（Ⅰ）. 琉球大文理紀要（理学篇），7：54-70.  
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執筆者名：島袋守成\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名：ニセクロハツ  
分類：ベニタケ科 ベニタケ目  
学名：*Russula subnigricans* Hongo  
カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は中～大型。傘は、まんじゅう形から中央のくぼんだ平らとなり、径5～11.5 cm、後にじょうご形となる。表面は乾燥し、ややビロード状、灰褐色～黒褐色で、周辺部はやや淡色。表皮ははぎ取りにくく、肉は厚くて堅くしまり、白色、切断し空気に触れると赤変する。ヒダは幅6～9 mm、直生またはやや垂生し、厚くて疎、クリーム色、傷をつけると赤変する。柄は円柱状で、長さ3～6 cm、幅1～2.5 cm、上下同径または下方に細まり、傘より淡色、不明瞭な縦のしわがあり、中実。担子胞子は類球形～球状卵形、7～9×6～7 μm、表面に微細ないぼと細かい網目がある。

分布域：本州中部以南、中国。  
県内の分布：西表島。  
生育環境：夏～秋、イタジイ等の常緑広葉樹林内の地上に子実体を生じる。  
生育状況：本種は西表島南部の山地森林一箇所から知られている。情報が不足している。  
学術的価値：西表島は本種の県内唯一の生育地である。本種の地理的分布の上で貴重である。  
備考：本種の子実体を食べると、死に至る強い中毒を起こすと言われている。

文献：今関六也・本郷次雄（編著），1989. ニセクロハツ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，47-48，p1. 82.  
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ニセクロハツ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，359.  
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執筆者名：西銘盛光\*・中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名：アイタケ  
分類：ベニタケ科 ベニタケ目  
学名：*Russula virescens* (Schaeff.) Fr.  
カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は中・大型。傘は、まんじゅう形から平らに開き、径6～12 cm、後にじょうご型になる。表面は灰緑色～灰青緑色、または淡黄緑色、不規則な多角形にひび割れしてかすり状の模様になる。肉は白色で、幼時はかたい。ヒダは白色のちややクリーム色を帯びる。柄は円柱状、5～10×2～3 cm、

かたくて中実、表面は白色で、多少しわ状の縦線がある。担子胞子は卵状類球形、7~8×6~6.5 μm、壁に小突起と細い隆起した連絡糸がある。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、中国、北アメリカ。  
 県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。  
 生 育 環 境 : 春~初夏に、広葉樹林の地上に発生する。  
 生 育 状 況 : 県内では沖縄島南部と北部および西表島東部から知られている。沖縄島南部の生育地は最近環境が悪化し、本種の子実体形成は観察されなくなった。情報が不足している。  
 学 術 的 価 値 : 子実体が緑色または青色を帯びる種類は少ないので、色調の点では数少ない特異な種である。  
 備 考 : 本種は食用となる。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄(編著), 1989. アイタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 54, pl. 85.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アイタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 369.  
 宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(Ⅰ). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

- 和 名 : ニワタケ  
 分 類 : イチョウタケ科 イグチ目  
 学 名 : *Tapinella atrotomentosa* (Batsch) Šutara  
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 子実体は中~大型。傘は、平らに開いて径5~15 cm、後に中央部で浅くくぼみ、縁は初め内側に強く巻いている。表面は初めビロード様の微細な毛で密に覆われるが、成熟すると次第に無毛、さび色~暗褐色。肉は厚く、白~暗褐色。ヒダは密で垂生し、しばしば柄付近で分岐または互いに連結して網目状、クリーム色~黄褐色。柄は太く、3~12×1~3 cm、強じん、偏心生~側生、表面には黒褐色の粗い毛を密生する。担子胞子は広楕円形~卵形で、4~6×3~4 μm。胞子紋は淡黄土色。
- 分 布 域 : 本州以南、北半球一帯。  
 県 内 の 分 布 : 西表島。樹木上に子実体を生じる。  
 生 育 状 況 : 宮城(1971)は本種を西表島東部から報告しているが、県内ではこれが唯一の生育地である。情報は不足している。  
 学 術 的 価 値 : 子実体の柄が偏心生、強じん太く、よく発達する本種の形質は、ハラタケ目のなかでは独特なものである。  
 備 考 : かなり大きくなる子実体であるが、食用には不適のようである。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ニワタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 140.  
 今関六也・本郷次雄(編著), 1987. ニワタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅰ)”, 保育社, 大阪, 267, pl. 68.  
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ニワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 288.  
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメサジタケ

科名 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学名 : *Trogia stereoides* Corner

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : スミレニガイグチ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Tylopilus obscureviolaceus* Har. Takahashi

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 70-100 mm、最初半球形、のち饅頭形〜ほぼ平開し、縁部は最初内側に巻く。傘全体が一様に暗青紫色を呈する。柄は 80-100×20-30 mm、基部が球根状に膨らみ、傘より淡色または褐色を帯び、根元に向かって暗色になる。上部または頂部に淡青紫色の繊細な網目模様を表す。傘の裏側は、小型の管孔である。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : スダジイとオキナワウラジログシを中心とする照葉樹林内地上に単生または散生。5〜6月。

生育状況 : 本種は、西表島の限られた場所でのみ観察されている。

減少の要因 : 希少である原因は不明である。

備考 : 情報が不足している。

文献 : 寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. 南西日本菌類誌. 東海大学出版会, 神奈川. 336-346.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和名 : フクロタケ

分類 : ウラベニガサ科 ハラタケ目

学名 : *Volvariella volvacea* (Bull.: Fr.) Sing. var. *volvacea*

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 4〜10 cm、まんじゅう形から中高の平らに開き、表面は繊維状、灰褐色で粘性はない。ヒダは離生し、白色のち肉色となる。柄は、長さ 3〜9 cm、白色、ほとんど平滑、基部には塊茎状にふくらみ黒褐色膜質のツボを有する。担子胞子は、卵形〜楕円形、7〜9.5×5〜7 μm。

分布域 : 南西日本、熱帯〜亜熱帯を中心に世界的に分布。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏季、林内の腐植の多い地上、サトウキビの搾りかす等に子実体を形成する。

生育状況 : 1960年8月、大里村（現南城市）の林内リター上に単生していることが報告された。その後、サトウキビの搾りかすを積み上げた上に発生を確認した。情報は不足している。

学術的価値 : これまでの調査・報告では沖縄島が県内唯一の生育地で、地理分布上貴重である。

備考 : 中国南部や東南アジアでは大量に人工栽培されている食用菌である。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. フクロタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄（監）, 山と溪谷社, 東京, 83.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著）, 1988. フクロタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 174-175.

宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について（I）. 琉球大文理紀要（理学篇）, 7: 54-70.

執筆者名 : 島袋守成\*\*・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメアワタケ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Xerocomus parvulus* Hongo

カテゴリー : 情報不足(DD)                      環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普